

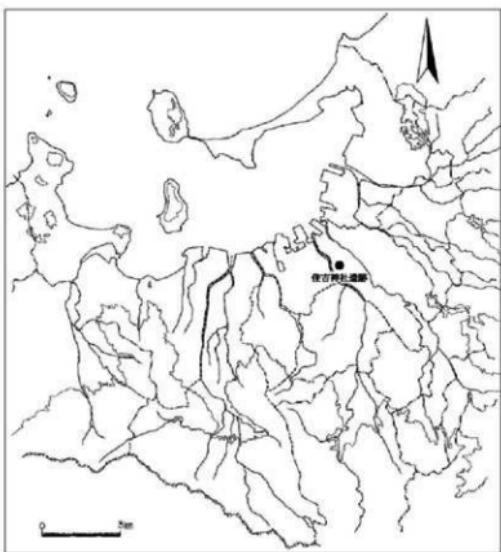
住吉神社遺跡1

— 住吉神社遺跡第1次調査報告 —



2006

福岡市教育委員会



遺跡番号 SYJ-1
調査番号 0446

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する住吉神社遺跡第1次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで株式会社早川不動産様をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成16年度に博多区住吉3丁目44番1において実施した住吉神社遺跡群第1次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸が行った。
3. 遺物の実測は、長家、木下博文、今井隆博、濱石正子、浜田美紀、相原聰子、福岡弘道、西江幸子が行った。
4. 製図は長家、撫養久美子が行った。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6°西偏し、真北から6°18'西偏する。なお座標は日本測地系を使用している。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は井戸（SE）、土坑（SK）、溝（SD）、ピット（SP）である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	0 4 4 6		遺跡略号	SYJ-1	
所 在 地	博多区住吉3丁目44番1			分布地図番号	49-2820
開 発 面 積	680.87m ²	調査対象面積	394.74m ²	調査面積	381m ²
調 査 期 間	平成16年8月9日～平成16年9月27日			事前審査番号	15-2-1151

本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査体制	1
II	調査の記録	6
1	調査経過	6
2	造構と遺物	6
1)	井戸	6
2)	土坑	12
3)	溝	24
4)	その他の遺物	34
5)	小結	34

挿図目次

第1回	調査区位置図1 (1/50,000)	2	写真1	調査区東半部全景 (西から)	35
第2回	調査区位置図2 (1/4,000)	3	写真2	調査区南西隅全景 (北から)	35
第3回	調査区位置図3 (1/1,000)	4	写真3	SE024 (北から)	36
第4回	調査区全体図 (1/100)	5	写真4	SE030・031 (東から)	36
第5回	SE015・025・037・038遺物図 (1/50)	7	写真5	SE030 (東から)	36
第6回	SE024及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	8	写真6	SE031 (東から)	36
第7回	SE030・031及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	9	写真7	SE032 (西から)	36
第8回	SE032・036及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	11	写真8	SE035 土層	36
第9回	SK002・003・004・006及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	13	写真9	SK002 (南から)	37
第10回	SK007・009及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	15	写真10	SK004 (南から)	37
第11回	SK010・011・014及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	16	写真11	SK006 (西から)	37
第12回	SK016・019・020・022及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	17	写真12	SK007 (北から)	37
第13回	SK026及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	19	写真13	SK019 (東から)	37
第14回	SK026出土遺物実測図2 (1/3)	20	写真14	SK022 (北から)	37
第15回	SK027・029及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	21	写真15	SK026 (西から)	38
第16回	SK033・034・035及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)	22	写真16	SK026 土層	38
第17回	sondage (1/200)	23	写真17	SD005 (北から)	38
第18回	SD005及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)	24	写真18	SD005 (南から)	38
第19回	SD012及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)	25	写真19	SD005 土層	38
第20回	SD012出土遺物実測図2 (1/2, 1/3)	26	写真20	SD012 層曲線以東 (北西から)	38
第21回	SD013及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)	28	写真21	SD012 層曲線 (西から)	39
第22回	SD017・021及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)	29	写真22	SD012 土層1	39
第23回	SD028実測図 (1/40)	30	写真23	SD012 土層2	39
第24回	SD028出土遺物実測図1 (1/3)	31	写真24	SD013 (北西から)	39
第25回	SD028出土遺物実測図2 (1/3)	32	写真25	SD013 土層1	39
第26回	SD028出土遺物実測図3 (1/3)	33	写真26	SD013 土層2	39
第27回	その他の遺物実測図 (1/3)	34	写真27	SD012・028 (北から)	40
			写真28	SD028 (北から)	40
			写真29	SD028 東西土層1	40
			写真30	SD028 東西土層2 (西半部)	40
			写真31	SD028 東西土層2 (東半部)	40
			写真32	SD028 南北土層	40

写真目次

写真1	調査区東半部全景 (西から)	35
写真2	調査区南西隅全景 (北から)	35
写真3	SE024 (北から)	36
写真4	SE030・031 (東から)	36
写真5	SE030 (東から)	36
写真6	SE031 (東から)	36
写真7	SE032 (西から)	36
写真8	SE035 土層	36
写真9	SK002 (南から)	37
写真10	SK004 (南から)	37
写真11	SK006 (西から)	37
写真12	SK007 (北から)	37
写真13	SK019 (東から)	37
写真14	SK022 (北から)	37
写真15	SK026 (西から)	38
写真16	SK026 土層	38
写真17	SD005 (北から)	38
写真18	SD005 (南から)	38
写真19	SD005 土層	38
写真20	SD012 層曲線以東 (北西から)	38
写真21	SD012 層曲線 (西から)	39
写真22	SD012 土層1	39
写真23	SD012 土層2	39
写真24	SD013 (北西から)	39
写真25	SD013 土層1	39
写真26	SD013 土層2	39
写真27	SD012・028 (北から)	40
写真28	SD028 (北から)	40
写真29	SD028 東西土層1	40
写真30	SD028 東西土層2 (西半部)	40
写真31	SD028 東西土層2 (東半部)	40
写真32	SD028 南北土層	40

I はじめに

1 調査にいたる経過

平成16年3月16日付けで株式会社早川不動産 代表取締役早川眞市氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区住吉3丁目44番1外3筆の物件に関して、共同住宅建設に関する埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号15-2-1151）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である住吉神社遺跡（分布地図番号49-2820・遺跡略号SYJ）に隣接しており、筑前一の宮である住吉神社南西側に位置している。この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上平成16年7月21日に申請地内の試掘調査を行い、現況地表面から75cm前後で井戸、土坑等の遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成16年度に発掘調査、平成17年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお申請地680.87m²のうち、調査対象としたのは建物建築部分の394.74m²で、駐車場等として使用される残地に付いては、遺構面まで工事の影響が及ばないため現状保存することとしている。

調査期間は平成16年8月9日～平成16年9月27日である（調査番号0446）。調査面積は381m²、遺物はコンテナ50箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては株式会社早川不動産をはじめとする関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2 調査体制

事業主体 株式会社早川不動産

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査總括 埋蔵文課財課長 山口謙治

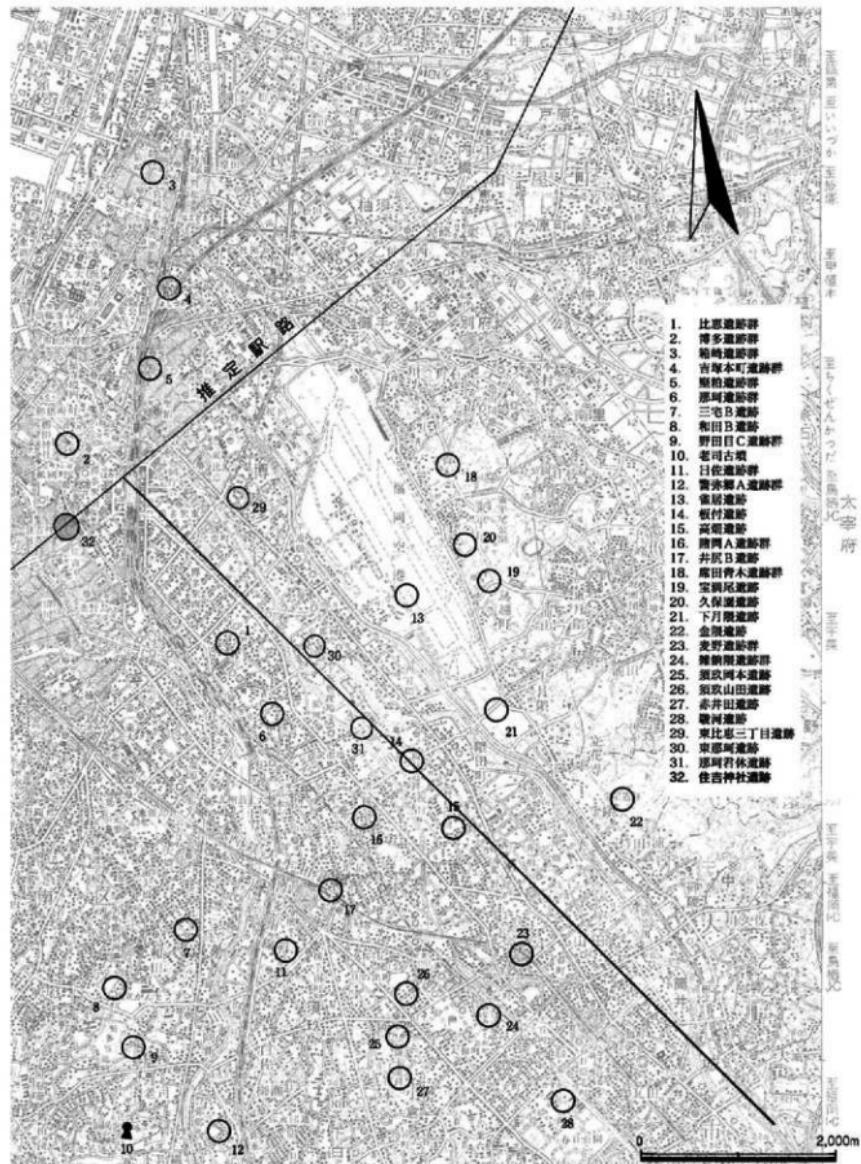
調査第2係長 池崎謙二

調査庶務 文化財整備課 御手洗清（前任） 鈴木由喜（現任）

調査担当 調査第2係 長家伸

調査作業 澄川アキヨ 中村フミ子 岩本三重子 越智信孝 藤野トシ子 中村サツエ

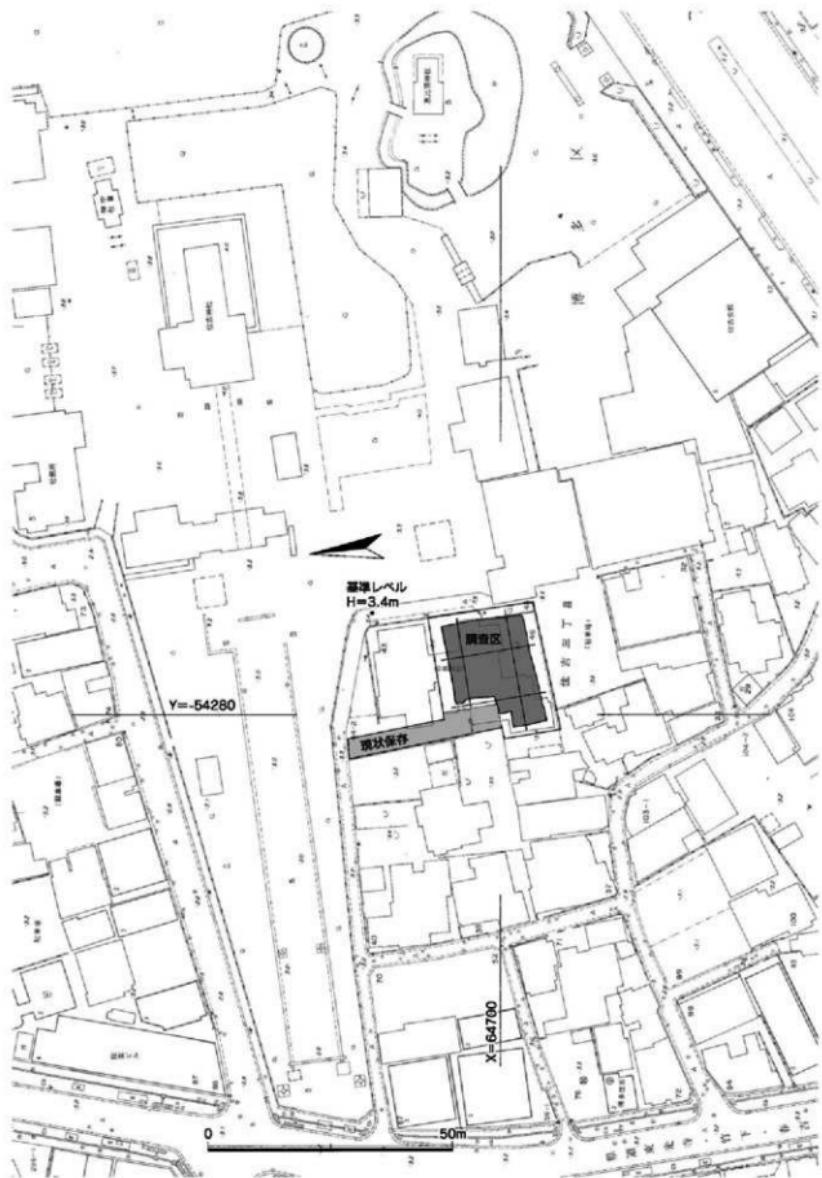
藤野幾志 西川シズ子 宮崎幸子 斎野孝子 中島道夫 川下信弘



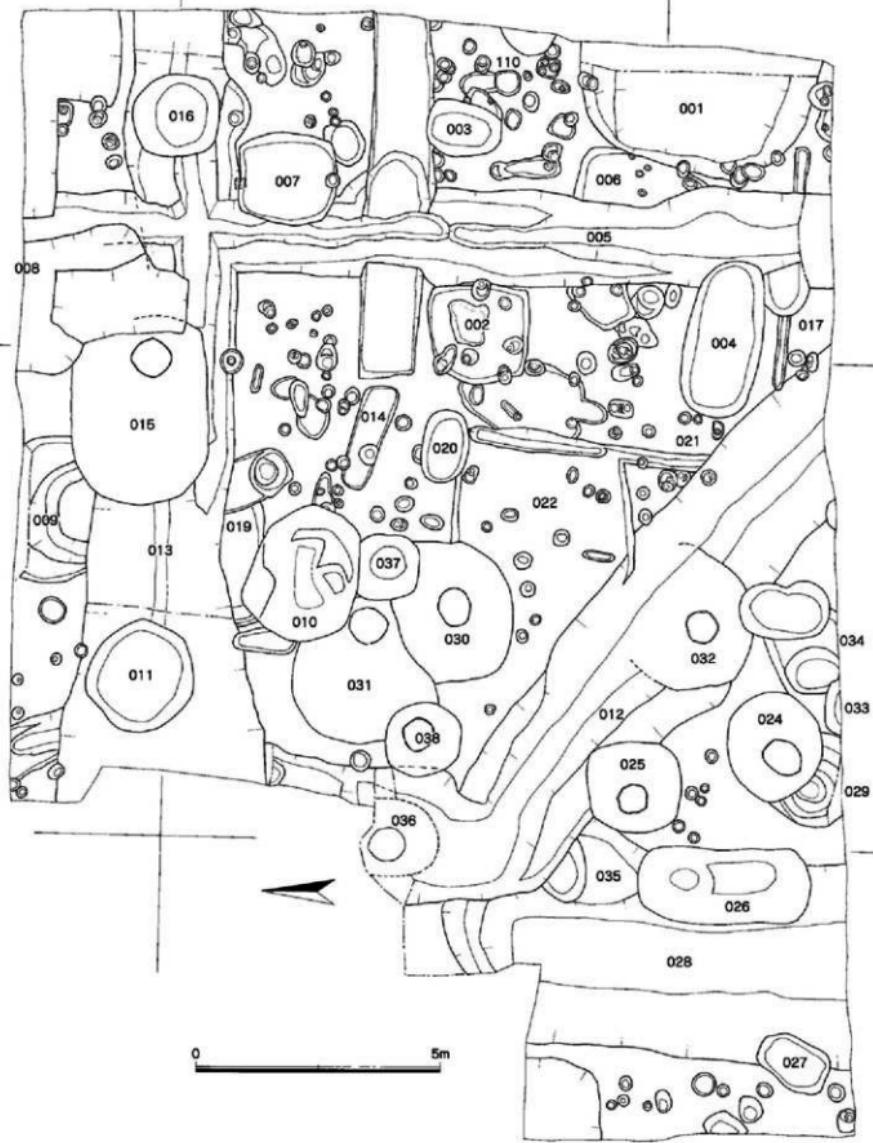
第1図 調査区位置図 1 (1/50,000)



第2図 調査区位置図2 (1/4,000)



第3図 調査区位置図3 (1/1,000)



第4図 調査区全体図 (1/100)

II 調査の記録

1 調査経過

住吉神社遺跡は福岡平野の臨海部に位置し、博多遺跡群の南側に立地する遺跡であり、本遺跡は名のとおり筑前国一の宮である住吉神社を中心として広がる遺跡である。住吉神社周辺は現在市街地が進み旧地形がわからにくくなっているが、本来は西側を北流する那珂川の河口部分であったものと考えられる。住吉神社は古くから航海神として信仰を集めしており、文献上は統日本紀天平9年（737）を初出とし、和歌関連の文献資料が多くみられ、和歌神としても崇拝されていた。鎌倉時代には幕府に仕えた佐伯氏が神官御家人として知られる。平安時代末～室町期には院領として存続するが、文明12年（1480）に連歌師宗祇が參詣した折には、度重なる戦乱で荒廃した様子が詠まれている。その後江戸時代になって黒田氏が入国すると長政による本殿再建が行われるなどして現在にいたっている。前述の本殿は国指定重要文化財、能楽殿は市指定文化財である。また出土地不明ながら社蔵の銅戈6口・銅矛5口は県指定の文化財となっている。

今回の調査対象地は住吉神社の南西側隣接地にあたる。申請地は調査前には戸建住宅として使用されており、現況地表面標高は3.2～3.6m前後を測る。調査は重機による表土除去から行うこととした。廃土処理の関係上北東半部分の調査を行った後、土砂を反転して残りの部分の調査を行った。遺構面は盛り土および近世以降の遺構面と考えられる暗褐色土を1m前後除去した後の黄褐色シルト～砂質土上面である。遺構面標高は2.5mを測り、調査区内ではほぼ平坦であった。遺構は調査区全面に濃密に分布しており、主な検出遺構は井戸9基、土坑21基、溝6条、その他ピットがある。出土遺物は中近世のものが中心となるが、隣接する博多遺跡群と比較すると陶磁器類・金属製品（鉄釘等）などが少ないようである。また土解器坏・皿類に高台を貼り付けたものが多く出土しており、住吉神社に関連した遺物として注目される。なお社蔵の青銅器や前述の文献資料の存在、また古代官道推定線が住吉神社直近を通ることなどから該期の遺構・遺物の存在も想定しながら調査を行ったが、今回の地点では極少量の遺物は出土したもの、遺構は認められなかった。また溝・土坑等の掘り方主軸方位が、現在の住吉神社本殿を中心とした主軸（磁北よりN-88°-E）に直交もしくは平行するものも多く見られ、遺構配置等に規制が働いていたことが見受けられる。現在の本殿は1623年黒田長政による再建とされているが、同方位の遺構は更に中世前半まで遡ることができる。

なお調査に用いた標高は都市計画図より拾い上げたH=3.4m（道路中央：第3図）よりレベル移動を行ったものを基準とした。

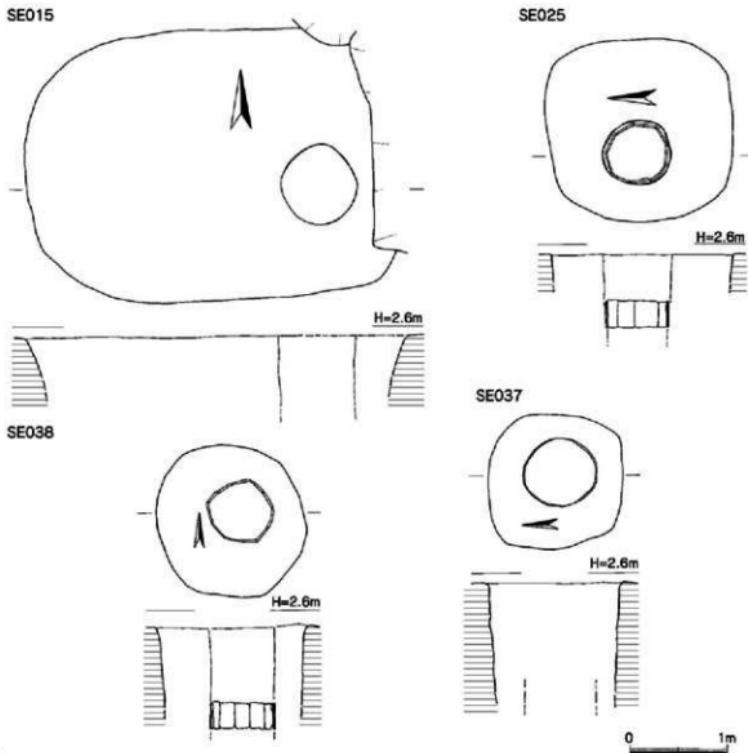
2 遺構と遺物

1) 井戸

井戸は9基確認されている。時期的には近世に位置付けられる瓦組みのものとこれ以外の中世のものに大別できる。近世の井戸（4基）は全面に潤澤なく分布しているが、中世（5基）の井戸は調査区南西部分を中心に切り合いも有しながらまとまった分布を示している。

S E015（第5図）

調査区北側で検索する。SD013・SK009を切り、SK008に掘り方の一部を切られている。掘り方は平面小判形を呈し、長軸4m、短軸2.8mを計る。掘り方の長軸方位をN-88°-Eにとっており、現住吉神社主軸方位にほぼ一致している。井戸側は掘り方東よりに径80cmの瓦組みが行われている。埋土は掘り方が灰褐色～黄褐色砂質土で井戸側内が黒褐色土である。掘り方・井戸側それぞ



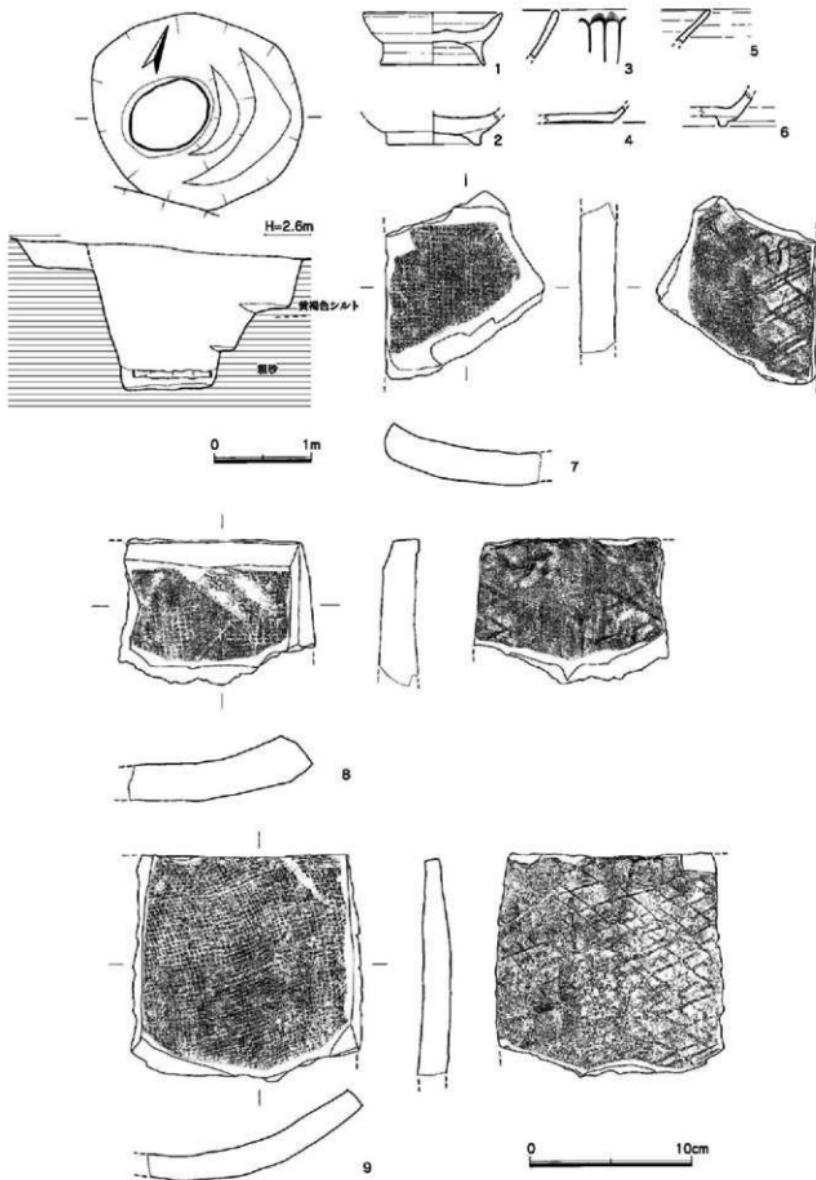
第5図 SE015・025・037・038実測図 (1/50)

れ検出面から40cm・70cmまでの掘り下げしか行っていない。近世陶磁器・瓦類が出土している。

SE024 (第6図)

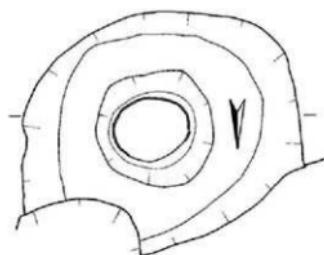
調査区南側で検出する。SK029→SE024の関係となる。掘り方は $2.1 \times 1.9\text{m}$ の円形に近く、東側に2段の平坦面を有しながら掘り下げられており、掘り方底面は標高1mを測る。掘り方の埋土は検出面から20cmは褐色砂質土、これ以下は灰土を帯びた暗褐色土で黄褐色シルトブロックを含んでいる。井戸側は検出面から130cmで確認され、曲げ物と考えられる井戸側の木質は高さ10cm程しか残存していなかった。おそらく井戸の廃棄に伴って井戸側を破壊したものと考えられる。なお井戸側内の埋土は粗砂が堆積していた。出土遺物は土師器・陶磁器・瓦が出土しており、中世後半～末に位置付けられる。

出土遺物 (第6図) 1・2は高台を有する土師器皿である。高台は高さ1.5cm前後を測る。3は龍泉窯系青磁碗である。外面に細連弁を刻み、連弁の先端は三角形に陰刻されている。釉調はオリーブ灰色を呈し、胎土は灰色で緻密である。4は全面施釉された白磁皿である。5は朝鮮時代の青灰色

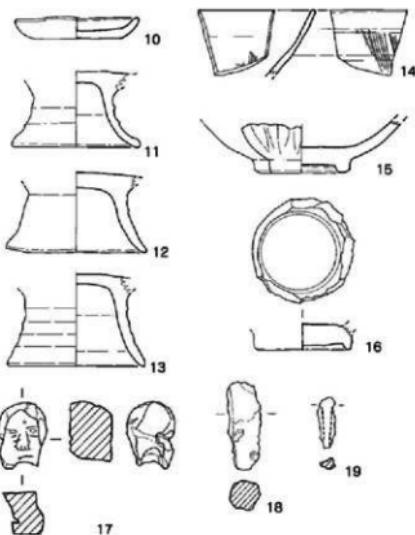
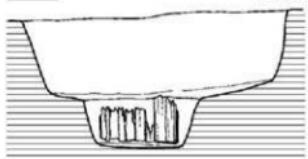


第6図 SE 024及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

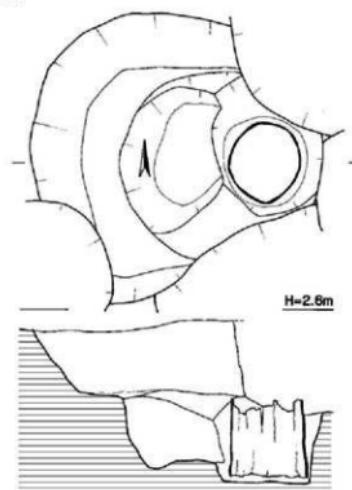
SE030



H=2.6m

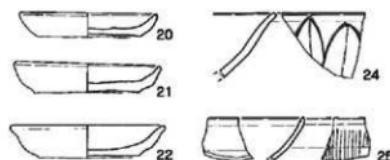


SE031



H=2.6m

0 1m



0 10cm

第7図 SE030・031及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

陶器であろう。口縁部先端は僅かに屈曲し、肥厚している。6は須恵器高台付き壺である。8世紀代のものであろう。7~9は平瓦である。焼成は7・8が土師質、9が須恵質で、凹面にはいずれも布目が残っている。また7の凸面叩き痕跡には格子の中に「弓」字状の模様が残る。

S E025 (第5図)

調査区南西部で検出し、S D012を切る。掘り方は一辺1.9mの隅丸方形を呈し、おおよその掘り方主軸方位をN-90°-Eにとっており、現住吉神社主軸方位にはほぼ一致している。井戸側は掘り方中央やや寄りに径60cmの瓦組みが行われている。また瓦組みの下、標高1.8mの位置から木質の水溜めが確認されている。掘り方・井戸側それぞれ検出面から20cm・75cmまでの掘り下げしか行っていない。近世陶磁器・瓦類が出土している。

S E030 (第7図)

調査区西側で検出する。平面的にはS E031→S E030の先後関係となる。掘り方は2.8×2.3mの隅丸長方形～長円形を呈し、中央部に径75cmの桶組みの井戸側を据える円形の掘り込みを有する二段掘りとなる。掘り方底面は標高1.1mを測るが、現在では湧水は認められない。出土遺物は糸切りの土師器（高台付きを含む）・龍泉窯系および同安窯系青磁等が出土しており、中世前半代（13世紀代）に位置付けられる。

出土遺物（第7図 10~19） 10は外底面糸切りの土師器小皿である。11~13は高さ4cm前後を測る土師器の高台である。14・15は青磁碗である。14は同安窯系で内外面に柳状工具による施文を行う。15は龍泉窯系で鏡連弁を有する。16は白磁底部である。高台外面以下は露胎となる。17は石鍋の転用と考えられる滑石製品である。表面に細線により人面が刻まれる。18・19は鈍化の進んだ柳状鉄製品である。釘であろうか。

S E031 (第7図)

調査区西側で検出する。S E031→S E030の関係となる。掘り方の北側をS E037とSK010に切られており正確な大きさはわからないが、掘り方は長軸3m以上、短軸2.9mの隅丸長方形に近い。井戸側は残存状況が不良であるが、径80cmの桶組みと考えられ掘り方の東寄りに据えられている。掘り方底面は標高0.8mを測り、これよりわずか下の標高0.75mで湧水が始まる。出土遺物の組成はS E030とほぼ同じで、中世前半代（13世紀代）に位置付けられる井戸であろう。

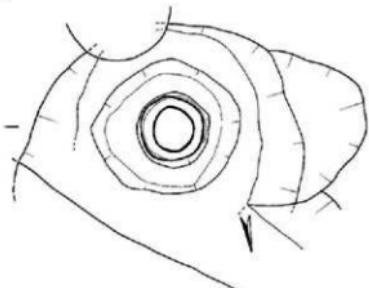
出土遺物（第7図 20~27） 20~22は外底面糸切りの土師皿である。23は器高4cmの高台である。外面に明瞭なロクロ目が残る。24は龍泉窯系の鏡連弁青磁碗である。25は外面に柳目を施す同安窯系の青磁皿である。26・27は土師質の擂鉢である。27の内面には掘り目と密な横刷毛が残る。

S E032 (第8図)

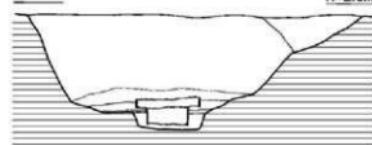
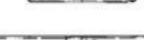
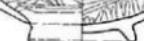
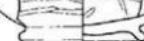
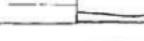
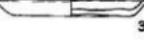
調査区南側で検出する。S D012掘り下げ中に検出し、S E032掘り方の埋土が乱されていなかつたことからS D012→S E032の関係と考えられるが、北側はS D012埋土と同時に掘り下げてしまっている。掘り方は3m弱の略円形に復元でき、中央に井戸側設置のため階段状に掘り下げを行っている。掘り方底面は標高1.3mを測る。掘り方の埋土は暗灰色を主体とし、井戸側内は暗黒灰色土である。井戸側・水溜めは木製であるが、腐敗のため構造は明らかではない。出土遺物は糸切りの土師器壺・皿（低い高台貼付が1点あり）、陶磁器、瓦器等が出土しており、12世紀中頃～後半に位置付けられる。

出土遺物（第8図 28~40） 28は龍泉窯系青磁碗で内面に片彫の花文を有する。29~32は外底面糸切りの土師器皿である。33は糸切りの後土師器皿に高さ7mmの高台を貼り付ける。34・35は糸切りの土師器壺である。36は土師器椀である。外底面に「加」の墨書を有する。37は黒色土器A、

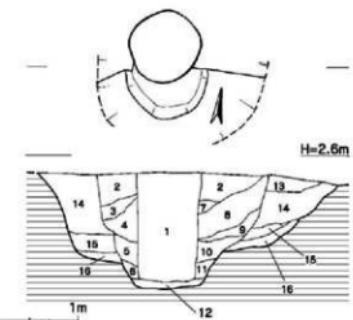
SE032



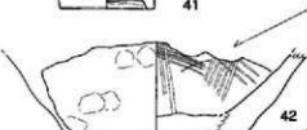
$H=2.6m$



SE036



- | | | |
|-------------------|---------------|----------------------|
| 1. 灰色土（人骨大塊が多く入る） | 7. 灰色土と黄褐色砂質合 | 13. 黄褐色砂 |
| 2. 灰灰土 | 8. 4層に同じ | 14. 灰灰土 |
| 3. 黄褐色土 | 9. 5層に茶味帯びる | 15. 黄褐色砂に暗灰色ブロック合 |
| 4. 灰褐色土 | 10. 灰灰土 | 16. 黄褐色土と黄褐色砂質合（2:1） |
| 5. 灰色砂質土 | 11. 6層に同じ | |
| 6. 灰白色砂質土 | 12. 灰褐色土 | |



1~12層はSE036、13~16層はSD012

0 10cm

第8図 SE032・036及び出土遺物実測図（1/50、1/3）

38は黒色土器Bの椀である。39は瓦器椀である。40は球形の砂岩製品で、部分的に敲打痕が残る。

S E 036 (第8図)

調査区西側で検出する。SD012→SE036の関係となるが、調査区境界に位置しており、埋土の大半をSD012として掘り下げた後に井戸の存在に気付いたため、規模の確認も土層図からの復元が主となっている。掘り方は径1.8m前後の略円形に復元でき、中央に井戸唄を設置している。掘り方底面は標高1.2mを測る。井戸側は径70cm程で木製であるが、腐敗のため構造は明らかではない。また井戸側埋土中に人頭大の礫が多く含まれており、井戸側上部に石積みの構造物が存在した可能性が考えられる。出土遺物は極少量で糸切りの土師器壺・皿類、龍泉窯系青磁I類破片等が出土している。12世紀後半代前に位置付けられる。

出土遺物 (第8図 41・42) 41は輪廻弁を有する龍泉窯系青磁碗である。42は瓦質の擂鉢である。内面に掘り目と、横方向の刷毛目が残る。

S E 037・038 (第5図)

調査区西側で検出した瓦組みの井戸である。SE037は掘り方一辺1.3mの隅丸方形を呈し、径70cmの木製水溜めが確認されている。またSE038は掘り方が径1.5mの円形を呈し、径60cmの瓦組みの井戸側を有する。ともに近世以降に位置付けられる。

2) 土坑

S K 001 (第4図)

調査区東南隅で検出する。南北長4.8mを測り、東側は調査区外となるが平面隅丸(長)方形に復元できる。埋土は灰色粗砂と暗灰色粘質土の互層状となり、検出面から40cmで掘り下げを止めている。近世以降の土坑である。

S K 002 (第9図)

調査区中央で検出し、SD005を切って掘削されている。東西長・南北長ともに2mを測り平面略方形を呈する。床面はほぼ平坦であるが、中央部分に不整形の緩やかなくぼみを有する。埋土は灰色砂質土である。出土遺物の大半は糸切りの土師器壺・皿破片であり、高台付きの皿も含まれるほか陶磁器が少量出土している。出土遺物や切り合い関係から14世紀代と考えておきたい。

出土遺物 (第9図 43~46) 43・45は外底面糸切りの土師器皿・壺である。44は高台付き土師器皿で、高さ2cm前後の高台を貼り付ける。46は上げ底の弥生土器底部である。弥生時代の遺物についてはこの1点のみである。

S K 003 (第9図)

調査区東側で検出する。主軸方位はN-78°-Wで、長軸1.5m、短軸1.1mの平面隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは50cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色砂質土である。遺物は底面糸切りの土師器、白磁、青磁(龍泉窯系青磁碗II類)破片が出土している。13世紀前半代であろうか。

出土遺物 (第9図 47~49) 47は玉縁の口縁部を有する白磁碗である。48・49は外底面糸切りを行う土師器壺である。

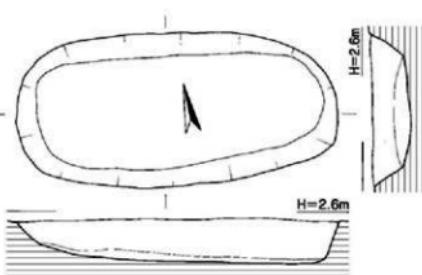
S K 004 (第9図)

調査区東南側で検出し、SD005を切る。主軸方位はN-77°-Wで、長軸3.2m、短軸1.6mの平面小判形を呈する。検出面からの深さは40cmを測り、断面は浅皿状である。また埋土は灰褐色砂質土である。遺物は土師器、白磁、青磁、瓦質土器、瓦が出土しており、有孔の高台付き皿も含まれている。中世後半に位置付けられる。

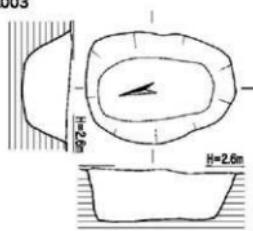
SK002



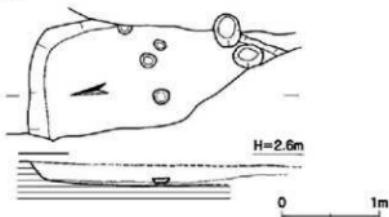
SK004



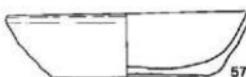
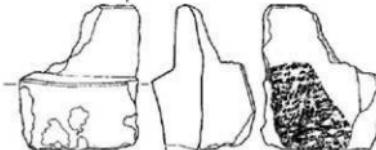
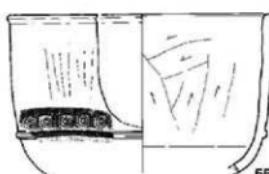
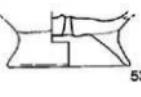
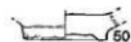
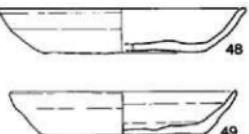
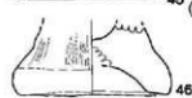
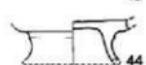
SK003



SK006



0 1m



0 10cm

第9図 SK002・003・004・006及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

出土遺物（第9図 50～56） 50は龍泉窯系青磁碗底部である。高台疊付のみ露胎となる。51は白磁壺の底部である。高台は鋭利な角高台である。52は外底面糸切りの土師器皿である。53は高さ2cmの高台である。皿が載るものと考えられ、底面に焼成前穿孔を有する。54は高さ5cm弱の大型の高台である。開き具合は53によく似ている。破片となっているために不明瞭であるが、底面中央に穿孔の可能性が考えられる。55は瓦質の鉢である。下半部に突帯を有し、その上部に印文を施す。56は玉縁を有する丸瓦である。凹面に縦状の痕跡が残り、凸面に綱目の叩きの後ナデ消している。

S K006 (第9図)

調査区南東側で検出する。SD005との切り合いは不明確であるが、SD005掘り下げ途中にラインを確認しており、本来はこれに後出する遺構と考えられる。平面は（長）方形に復元でき、掘り方主軸方位はSK004にはほぼ平行するものと考えられる。検出面からの深さは20cmを測り、底面はほぼ平坦である。また底面直上に完形の土師器壺1個体（57）が正置されている。埋土は灰褐色砂質土である。遺物は土師器のほか白磁・青磁・瓦が出土している。瓦片は2点あり、いずれも須恵質で凹面布目、凸面綱目の叩き痕跡が残っている。主軸方位（N-79°-W）からみるとSK004に近い時期も考えられる。中世後半代に位置付けられよう。

出土遺物（第9図 57） 57は完形に近い土師器壺である。口径15.2cm、器高4cmを測る。外底面は糸切りを行い、板状圧痕が残る。

S K007 (第10図)

調査区北東側で検出し、SD005を切る。一辺1.9～2mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは30cmを測り、底面はほぼ平坦となる。また埋土は暗灰色砂質土である。規模・形状・方位とともにSK002とほぼ同じであり、具体的には不明であるが、同様の機能を有する竪穴と考えられる。遺物は糸切りの土師器壺・皿（高台を有するものあり）、白磁・青磁が出土しており、時期的にもSK002に近い時期が考えられる。

出土遺物（第10図 58～62） 58～60は青磁である。58は皿で、内面にヘラ描きの花文が施される。残存部では外面露胎である。59・60はヘラ及び櫛描きによる花文を施す。61・62は土師器皿である。62には高さ3cm程度の高台が貼り付けられる。

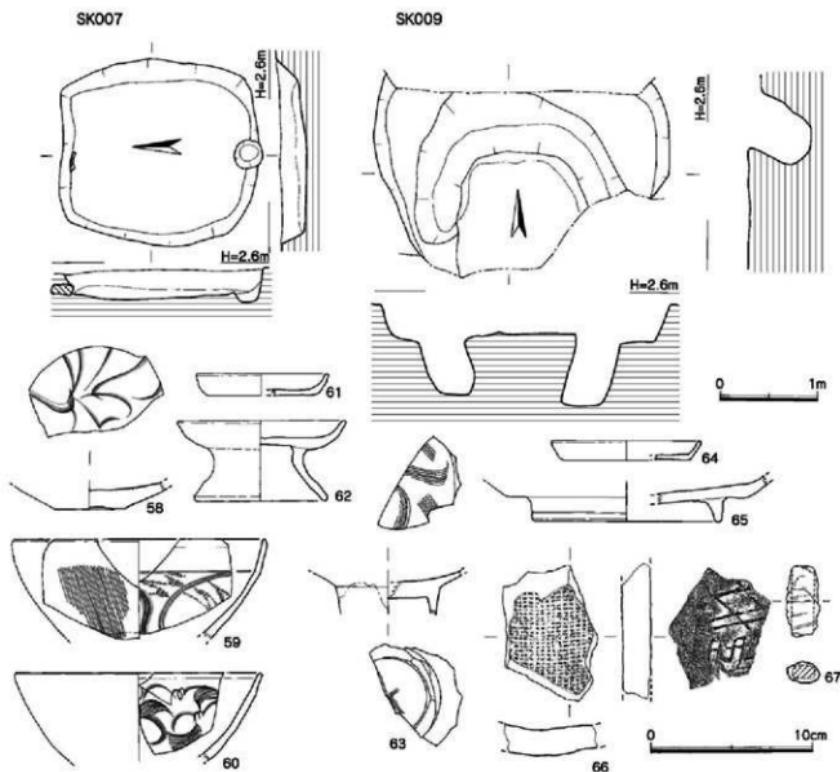
S K008 (第4図)

調査区北側で検出する。SD005→SD013→SE015→SK008の関係となる。埋土は黄褐色シルトブロックを多く含む暗灰色土で、検出面から20cmほど掘り下げた後は未掘である。井戸側は確認していないが、近世以降の瓦組み井戸であろうか。

S K009 (第10図)

調査区北側で検出する。北側は調査区境界で未掘となり、南側はSE015及びSD013で削平されている。平面略長方形を呈する土坑底面に、幅60cm、深さ50cmほどの溝を巡らせるが、この溝は西側で立ち上がっており、復元すると馬蹄形を呈するものと考えられる。埋土は暗灰色土と黄褐色シルトが互層状となって堆積している。出土遺物には糸切り土師器壺・皿（高台を有するものあり）、陶磁器、瓦のほか壁体状の粘土がある。遺構の機能等については不明であるが、12世紀中頃～後半代と考えられる。

出土遺物（第10図 63～67） 63は白磁碗である。内面には櫛描き文様があり、外底面には墨書きが残る。64は糸切りの土師器皿である。65は高台付き皿である。66は土師質の平瓦で、凸面の叩きにSE024出土瓦（7）と同じ「弓」字状の文様が認められる。67は不明鉄製品である。



第10図 SK007・009及び出土遺物実測図（1／50、1／3）

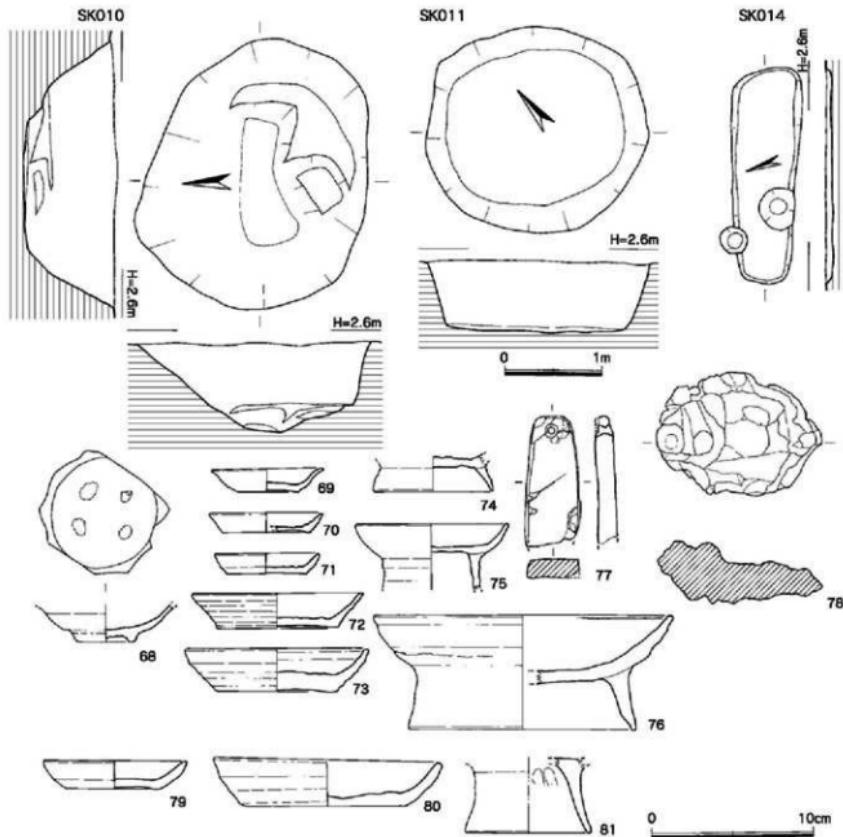
SK010 (第11図)

調査区中央部で検出し、SE031とSK019を切り、SE037に切られる。長軸2.7m、短軸2.2m、検出面からの深さは90cmを測る。掘り込みはやや不整形となるが、底面は略長方形を呈しほぼ平坦となっている。埋土は検出面から20cm程は暗褐色砂質土で、以下は黄褐色シルトブロックを多く含む暗灰色土である。遺物は各の小型化した土師器壺・皿（高い高台を有するものが多く出土している）、灰青陶器が出土しており、中世後半～末に位置付けられる。

出土遺物（第11図 68～78） 68は朝鮮時代の灰青陶器の皿である。色調は緑灰色を呈し、胎土に白色砂粒を多く含んでいる。また底部外側にロクロ跡を残し、内底面及び高台疊付にそれぞれ4箇所の砂目跡が認められる。69～71は土師器小皿、72・73は壺である。74・75は高台付き皿、76は高台付き壺である。77は石製の錐であろう。下端を欠損するが、上端部には懸垂用の孔を有し、重量65gを測る。78は楕円形鐵治滓である。上面には銹化鉄が付着している。

SK011 (第11図)

調査区北西側で検出した略円形土坑である。SD013を切り、埋土は水分を含んでべたべたした暗



第11図 SK010・011・014及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

青灰色粘質土である。近世以降に位置付けられる。

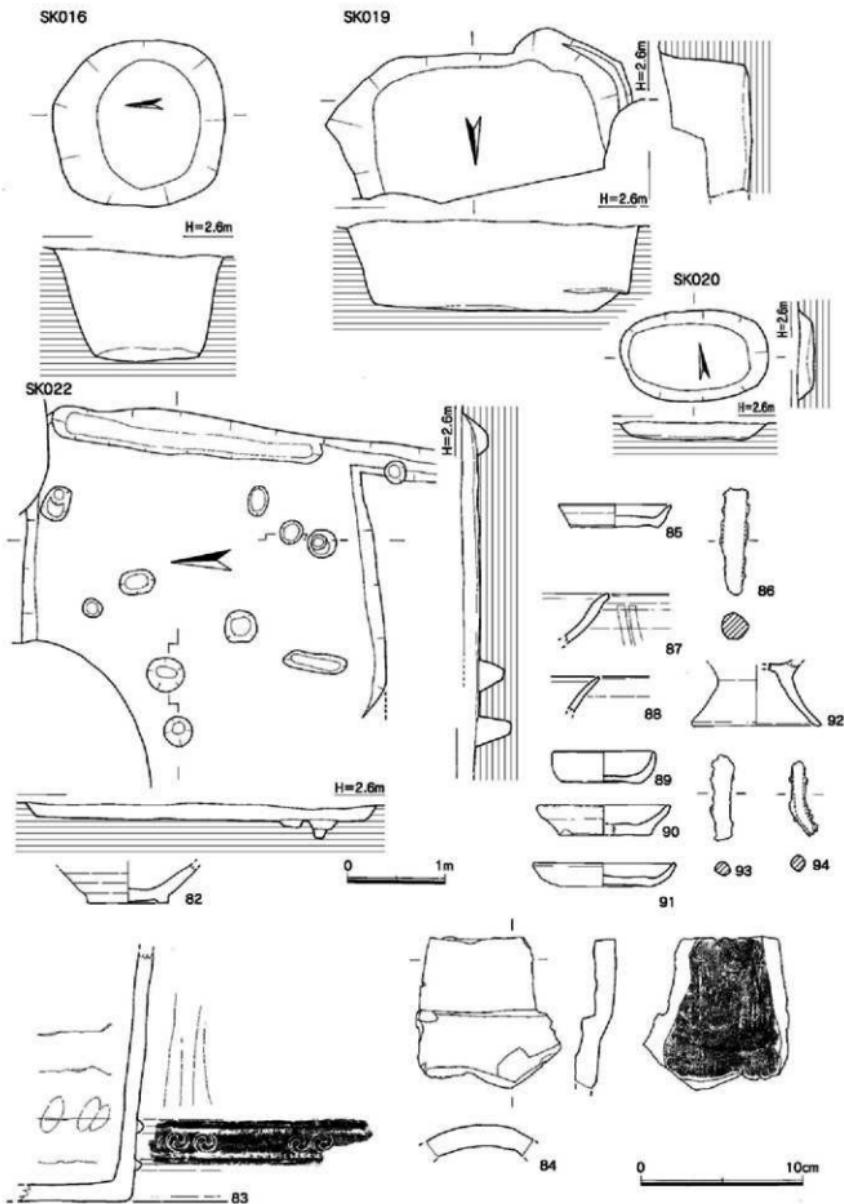
SK014 (第11図)

調査区中央で検出する。長軸2.2m、短軸0.7mを測り、検出面からの深さは5cm程度であるが、掘り込みはしっかりとしている。また底面はほぼ平坦となる。埋土は暗灰色砂質土で、粗砂を混合している。遺物は少量で糸切り土解器破片のみであるが、高い高台を有するものも出土している。同様の高台・土師器が出土しているSE030と同じ13世紀代を考えておきたい。

出土遺物 (第11図 79~81) 79は土解器皿、80は環である。81は高台で、高さ4cmを測る。

SK016 (第12図)

調査区東側で検出する。上面径1.7m、検出面からの深さ1.15mを測る。SD013掘り上げ後に確



第12図 SK016・019・020・022及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

認する。水分を多く含みべたした暗灰色土と黄褐色シルトがレンズ状に堆積している。出土遺物は土師器、同安窯系青磁、V類白磁等が少量出土するのみで時期不明である。

S K019 (第12図)

調査区中央で検出する。SD013・SK010に切られる土坑である。長軸3.2mを測り、平面(長)方形に復元できる。検出面からの深さは90cm程度で、底面はほぼ平坦である。埋土は暗灰色土と粗砂の混合土である。遺物は少量で土師器、陶磁器、瓦質土器が出土しており、中世後半に位置付けられる。

出土遺物 (第12図 82~84) 82は釉調淡緑色を呈する青磁碗である。83は瓦質の火鉢である。下半部の突帯間に巴文をスタンプする。84は玉縁を有する丸瓦である。凹面には布目が残る。

S K020 (第12図)

調査区中央で検出し、SK022を切る。平面隅丸長方形を呈し、長軸1.5m、短軸0.9m、検出面からの深さ20cmを測る。断面は浅皿状を呈し、底面は中央部分が緩やかに窪んでいる。埋土は暗灰色砂質土である。遺物は少量で糸切り土師器壺・皿、陶磁器の小破片、鉄釘1点が出土している。掘削方位がSK004・006・014、SD017・021等と類似しており、近接した時期の遺構の可能性も考えられる。

出土遺物 (第12図 85・86) 85は外底面糸切りの土師器小皿である。86は周辺に酸化土砂が付着して形状が不明瞭になっているが、鉄釘であろう。

S K022 (第12図)

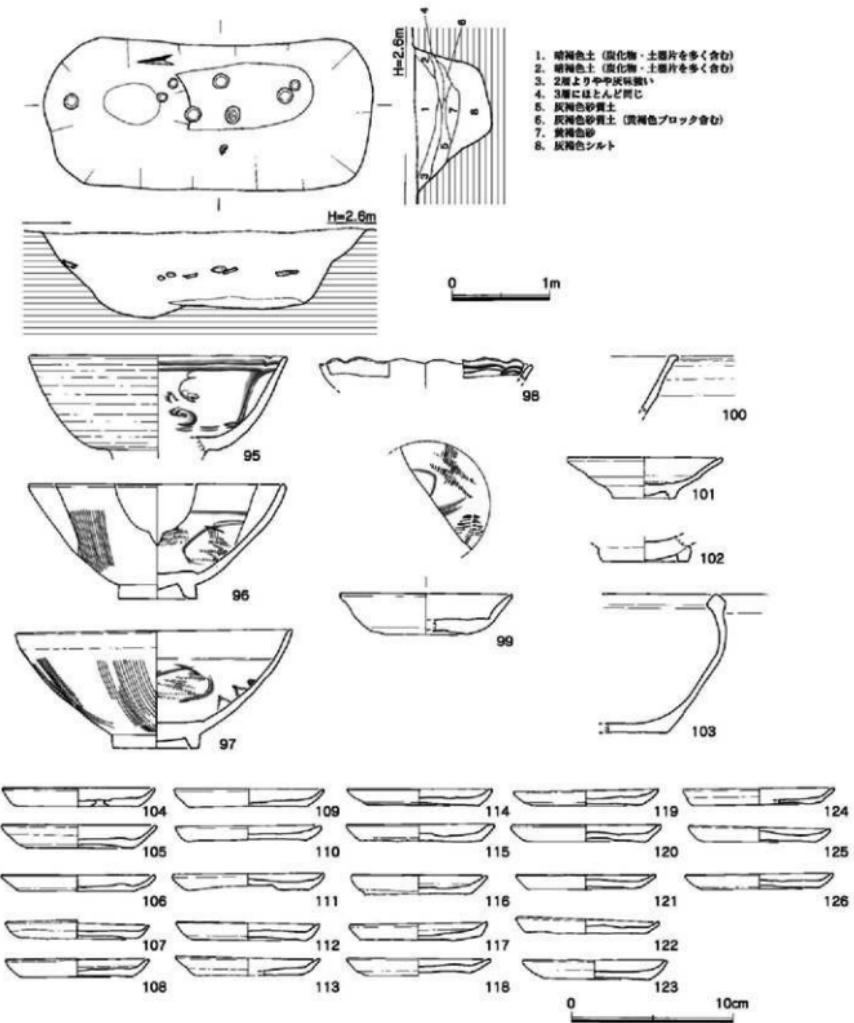
調査区中央で検出する。SK020に切られ、SE030・SD012との先後関係は明らかでないまま掘り下げを行っている。南北長・東西長とともに3.7mの方形プランを呈し、検出面からの深さ10~15cmである。底面は平坦で床面よりピットも検出しているが、これに伴うかどうかは不明である。壁はしっかりしているが西壁はやや不明瞭であった。また東壁はSD021にそのままつながっている。平面的には切りあい関係は認められず、一連の遺構である可能性も考えたが、明らかでないためここでは別の遺構として報告している。埋土は暗灰色砂質土である。遺物は糸切り土師器壺・皿、青磁、白磁が出土しており、14世紀初頭を前後するものと考えられる。

出土遺物 (第12図 87~94) 87は同安窯系青磁碗である。88は口禿の白磁皿である。89は土師器小皿で、口縁部周辺に煤が付着している。90・91は土師器皿である。92は高台で上部には皿が載るものと考えられる。93・94は銹化した鉄釘である。

S K026 (第13図)

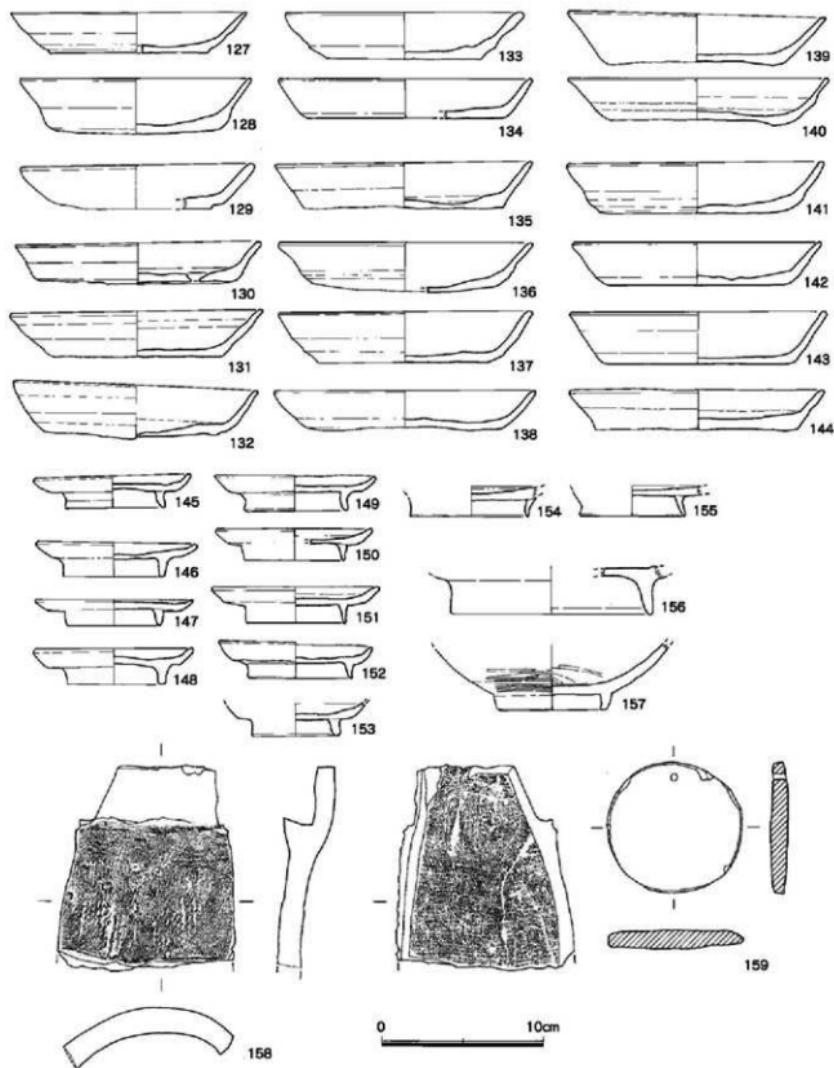
調査区西側で検出し、SD028を切る。平面は隅丸長方形で、主軸方位をN-87°-Wにとる。長軸3.3m、短軸1.5mを測り、検出面からの深さは80cmを測る。断面浅皿状を呈し、底面は北側が一段深くなる二段の掘り方となる。埋土は炭化物を含む黒灰色土である。遺物はコンテナで11箱出土しているが、その大半が土師器壺・皿類で、外底面は糸切りを行い、高台を有するものが多く出土している。その他陶磁器・瓦・鉄製品が出土している。12世紀中頃~後半の廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第13・14図) 95~99は青磁である。95・98は口縁部に輪花を有し、片形による文様を施す。96・97は同安窯系碗、99は皿である。100・101は白磁である。101は内面の釉を輪状に掻き取っている。102は陶器碗である。全面に施釉し、内底面及び高台置付には粘土目跡が残っている。103は陶器鉢である。胎土は灰色を呈し、内面は全面施釉しオリーブ色を呈する。外縁は口縁部下端以下露胎となる。104~156は土師器である。104~126は皿で外底面糸切りを行い、口径は8.5~9.2cmを測り9cm前後が最も多い。127~144は壺で口径14~15.5cmを測り、15cm前後が主体



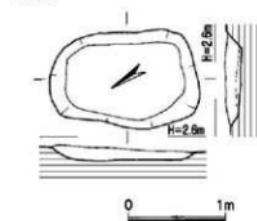
第13図 SK026及び出土遺物実測図1 (1/50, 1/3)

となる。また皿104は内底側、130は外底側から焼成後に径4mm程度の穿孔を行っている。145~155は高台付き土器皿である。高台はいずれも高さ1cm前後である。156は径の大きな高台である。

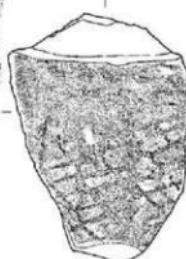
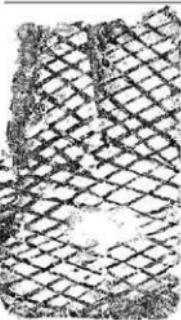
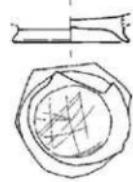
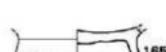
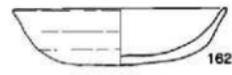
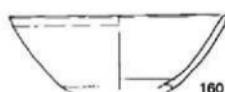
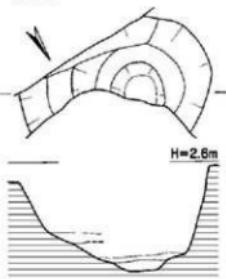


第14図 SK026出土遺物実測図2 (1/3)

SK027

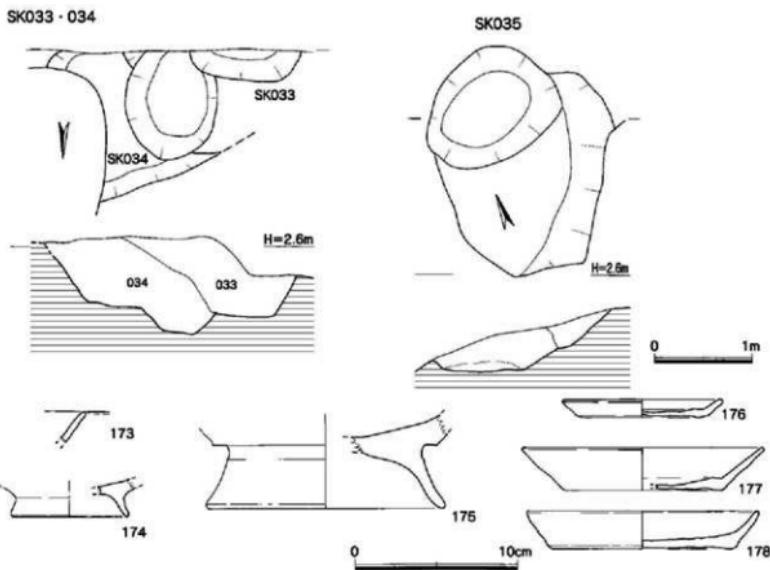


SK029



0 10cm

第15図 SK027・029及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)



第16図 SK033・034・035及び出土遺物実測図 (1/50、1/3)

157は瓦器碗である。158は丸瓦で凸面に綱目の印き、凹面に布目と紐状の痕跡が残る。159は滑石製の有孔円盤である。面径8cm、口径3mmを測る。

S K027 (第15図)

調査区西側で検出し、S D028を切る。平面は椭円長方形で、主軸方位をN-59°-Wとする。長軸1.5m、短軸1mを測り、検出面からの深さは10cmを測る。断面浅皿状を呈し、埋土はS K026と同じ炭化物を含む黒灰色土である。遺物は土師器、白磁、瓦類が少量出土するのみで、時期は不詳である。

S K029 (第15図)

調査区南西側で検出する。北側をS E024に切られ南側は調査区外となるため、形状が不明瞭であるが、およそ径2m前後の略円形に復元できる。検出面から底面までの深さは1.05mを測り、平坦面を有しながら階段状に掘り下げが行われている。埋土は検出面から50cmほど迄は暗黄褐色砂質土で、それ以下は灰白色粘質土となる。遺物はコンテナで3箱出土しているが、そのうち2箱が瓦である。瓦は凹面布目、凸面斜格子の印き痕跡が残るもののが主体を占めている。その他土師器は丸底でヘラ切りのものが多く認められる。11世紀代と考えられ、今回の検出遺構の中では最も古いものである。

出土遺物 (第15図 160~172) 160は白磁碗である。161・162はヘラ切りの土師器壺である。163~166は高台壺皿である。164・166の皿底部にはヘラ切り痕跡が残る。167は黒色土器A類碗である。168は土師器壺である。外面に煤が付着している。169~172は瓦類である。169・170は焼成

須恵質、171・172は土師質である。いずれも凹面に布目、凸面に斜格子の叩き痕跡が残る。

S K033 (第16図)

調査区南側で検出する。本来はS K029・034を切る遺構であるが、掘り下げ時には遺構プランを認識することができず、壁面土層からの復元となっている。上面径1.8m以上の円形に復元でき、調査区内での深さは60cm程度である。形状から井戸の一部である可能性が高いと考えられるが、現状では明らかにできていない。埋土は黄褐色土ブロックを少量含む暗灰色土である。この遺構の遺物として取り上げ得たものは3点に過ぎず、時期的には明らかにしがたいが、中世前半代であろうか。

出土遺物 (第16図 173・174) 173は白磁碗口縁部、174は高台付き土師器皿である。

S K034 (第16図)

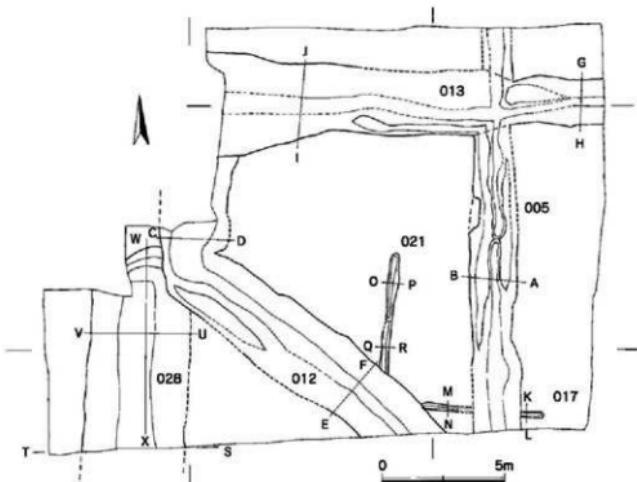
調査区南側で検出し、S K033に切られる。またS E024との先後関係は不明である。平面は隅丸長方形プランに復元できる。底面中央部が一段深くなり、検出面からの深さは80cmを測る。埋土は黄褐色シルトブロックを含む暗灰色砂質土である。遺物は少量であり、外底面系切りの土師器皿がほとんどである。また高い高台を有するものも含まれている。

出土遺物 (第16図 175) S K010出土76と同様の高台付き壺である。2次的に焼成を受けており、壺内面に煤が付着している。

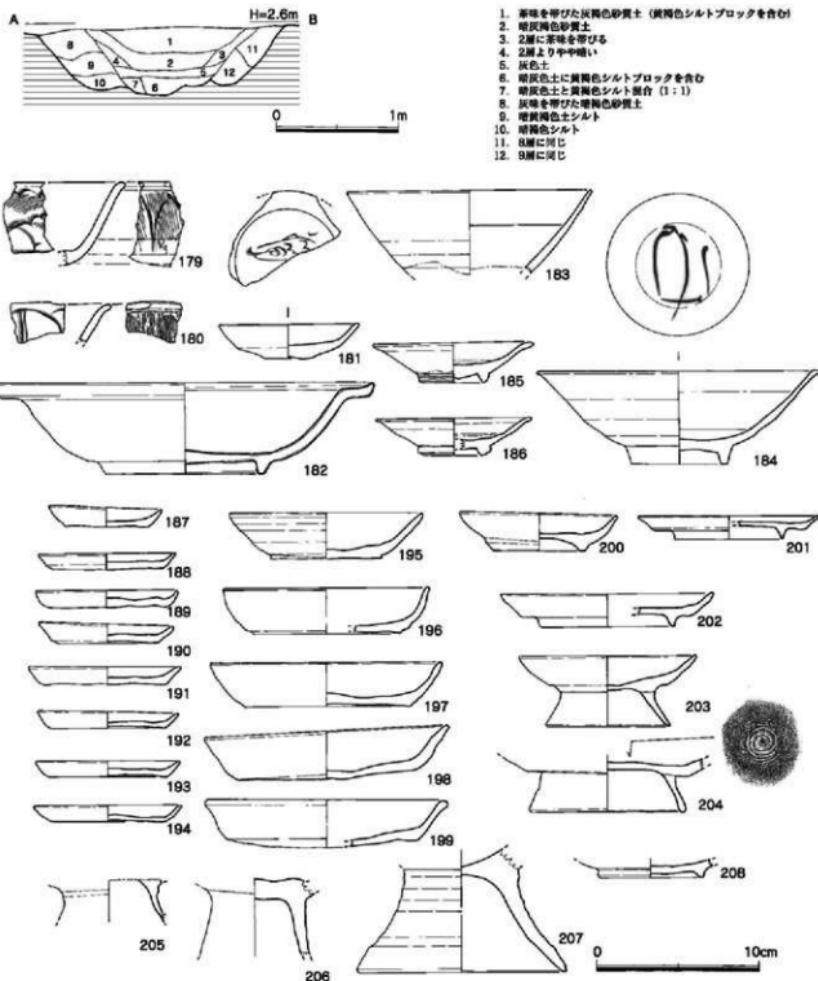
S K035 (第16図)

調査区西側で検出する。S D028壁面清掃時に埋土を確認して掘り下げている。平坦面から更に一段略円形の掘り込みを有するが、本来の形状は明らかでない。遺物は少量で土師器壺・皿のみである。時期的にはS D028と同時期のものであり、S D028の掘り方の一部である可能性も考えられる。

出土遺物 (第16図 176~178) 土師器皿・壺である。いずれも外底面は糸切りを行う。



第17図 溝配置図 (1/200)

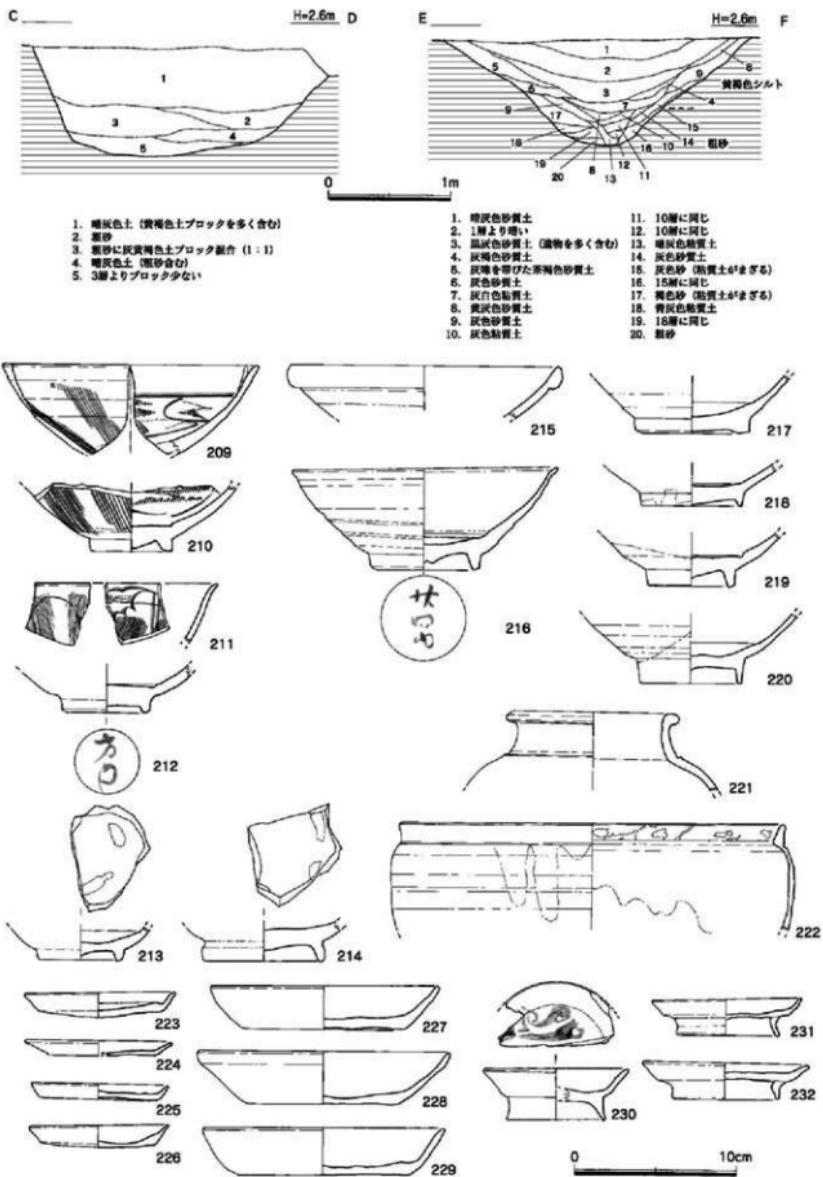


第18図 SD005及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

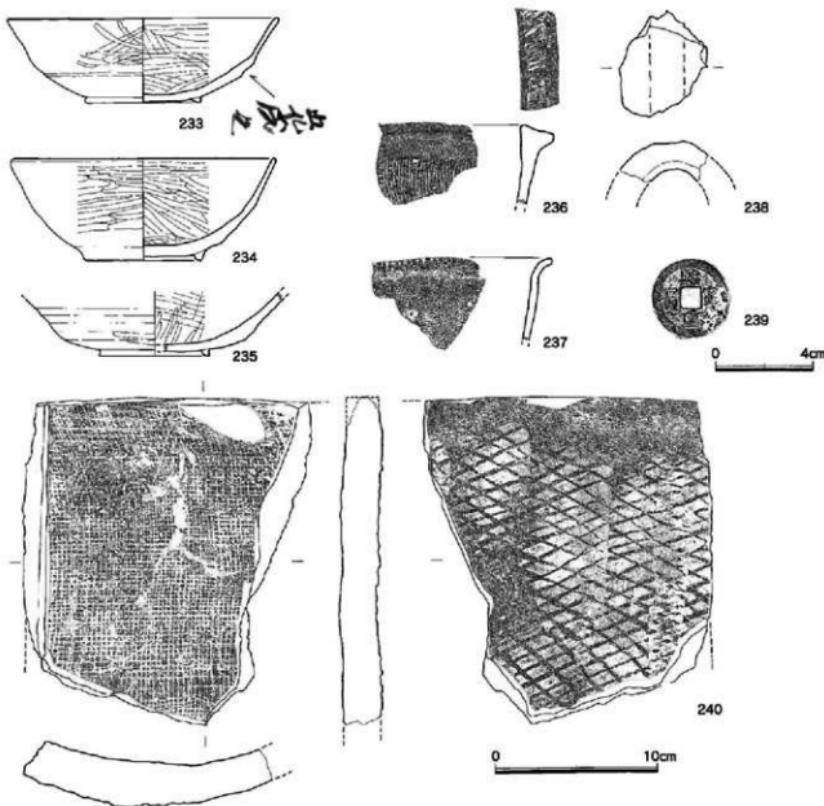
3) 溝

SD005 (第18図)

調査区東側で検出した南北溝である。主軸方位を磁北にとり、北側でSD013と直交する。溝幅は1.5~2m、検出面からの深さは60cm前後を測る。溝底は標高1.9~2mで、明瞭な傾斜は認められない。断面形状は底部中央がわずかに窪む逆台形を呈するが、土層を観察すると1~7層は溝を掘り



第19図 SD012及び出土遺物実測図1 (1/40, 1/3)



第20図 SD012出土遺物実測図2 (1/2, 1/3)

なおしたものと考えられ、初期の埋土は8~12層である。埋土中には砂層がほとんど堆積しておらず、明瞭な流水の痕跡は確認できない。遺物は土器類・皿類で、外底面は糸切りを行い、高台を有するものが多く出土している。その他陶磁器が出土している。13世紀~14世紀初頭の土地の区画に伴う直線溝と考えられるが、この時期既に現在の住吉神社主軸とほぼ同じ方位が採用されていることは注目される。

出土遺物（第18図） 179~182は龍泉窯系青磁である。179・180は小碗で、外面には櫛目を入れた後鏡の入らない片彫りの連弁文を施す。内面はヘラ及び櫛状工具による花文を施す。181は皿である。外底面のみ露胎となり、内底面には片彫りの単魚文を施す。182はにぶいオリーブ色を呈する高台付き皿である。高台疊付近のみ釉を搔き取り、その部分は淡い赤褐色に発色している。

183・184は白磁碗である。184内底面にはヘラによる記号状の文様が残る。185・186は内底面の釉を輪状に掻き取る皿である。187～207は土師器である。皿・杯の外底面はいずれも糸切りを行う。187は小皿、188～194は皿、195～199は杯である。200～207は高台付きの皿・杯類である。204は内底面中央に渦巻状の痕跡がスタンプされている。高台貼り付け時に伴う痕跡であろうか。208は瓦器碗底部である。

S D012 (第19図)

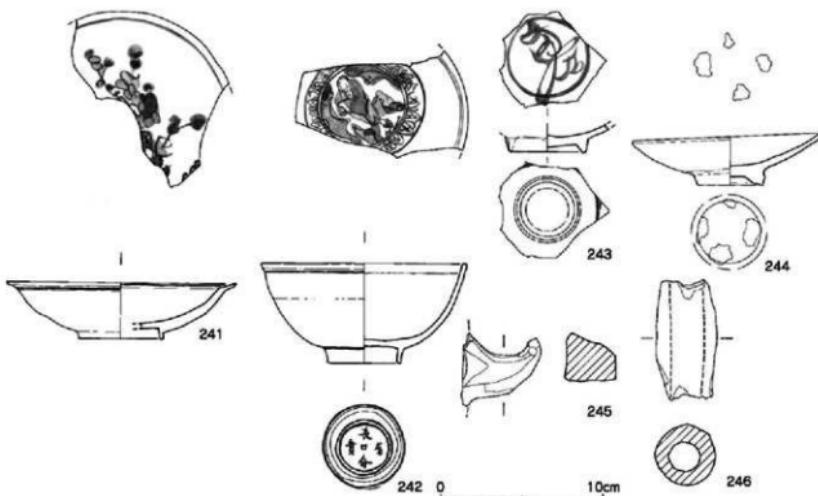
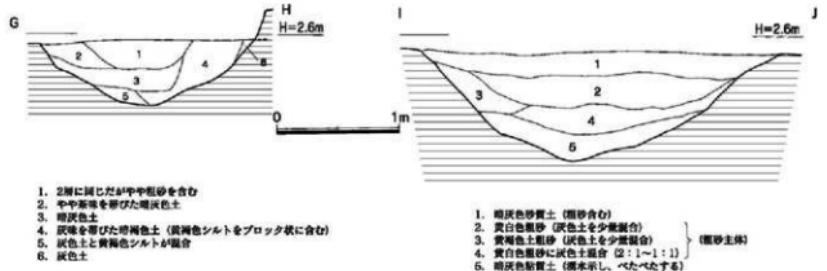
調査区南～西側で検出する。調査区西端でやや鈍角気味に折れ曲がる溝である。掘削方位は調査区に斜交する部分でN-50°-Wで、屈曲後ほぼ磁北方位となる。溝規模・形状は南東～北西部に伸びる直線部分では溝幅2.5～3m、深さは80cm程度を測る。断面は開き気味のV字状を呈し、土層断面からは溝の掘り直しが想定できる。また屈曲部分から北側では幅3m、深さ90cm前後を測り、断面形状も逆台形になっている。また屈曲部以北ではSD013に切られておりやや不鮮明であるが、調査区北端部では溝の延長部分が認められないため、SD013との切り合い部分で本来は溝が立ち上がるものと考えられる。溝埋土は屈曲以北では間に粗砂層が堆積しているが、屈曲部以南では掘り返し以前の埋土に粗砂が認められるが、掘り返し後は最下層に粘質土が堆積しており、滲水状態であったことが想定できる。遺物には土解器・皿類があるが、これには外底面糸切りのものが7割程度、ヘラ切りのものが3割程度含まれている。このほか白磁、青磁、瓦器が出土しており、時期的には12世紀前半に位置付けられる。なお調査時にはSD028を切るものとしていたが、出土遺物の検討からSD012が先行するものと考えられる。この溝はその形状から屋敷地等を囲む施設としての機能を考えることができるが、この掘削方位を考えると、12世紀前半以前には現況とは異なる主軸方位の造構群が展開していた可能性が考えられる。本調査地点ではこの時期に並行する造構群は認められていないが、住吉神社を含む周辺の造構の消長を考える上で今後注意を要する。

出土遺物 (第19・20図) 209・210は同安窯系青磁碗、211・212は龍泉窯系青磁碗である。212は外底面に墨書の痕跡が残る。213・214は高台疊付のみ露胎となり、疊付及び内底面に白色目跡が残る青磁碗である。215～220は白磁碗である。216は皿類で外底面に墨書が残る。221・222は陶器である。223～232は土師器皿・杯類である。223は外底面ヘラ切りで、板状圧痕が残る。他は外底面は糸切りを行っている。230～232は高台付き皿である。230は内底面に墨書き状の痕跡が認められるが判然としない。233～235は瓦器碗である。233は体部外面に横書きの墨書が認められる。236・237は弥生土器甕の口縁部である。236は張り出しの短いL字状口縁部を呈し、外側に巻き毛、内側に横ナデを行なう。237は口縁端部に刻みを行い、如意形を呈する。238は羽口である。外側は鈍い黄褐色を呈し、発泡している。鋲頭に使用したものであろうか。239は瀬寧重實(初譲1072年)である。240は須恵質の平瓦である。凹面には布目、凸面には斜格子の叩き痕跡が残る。

S D013 (第21図)

調査区北側で検出した東西溝である。主軸方位をN-91°-Eにとり、東側でSD005を切って直交する。溝幅は東側で1.8m、西側で4.3mとなり、大きく溝幅を広げている。溝底は東側で標高2m、中央部で1.6mとなり、西側への明瞭な傾斜が認められる。また埋土にも粗砂が含まれており、流水のあったことが想定できる。出土遺物には近世陶磁器、瓦、土師器のほか椀形鍛冶滓数点がある。近世以降の溝であるが、SD005に見られる区画方位に規制されたものであり、中世前半以降固定された地割に沿ったものである。

出土遺物 (第21図) 241～243は染付けの碗・皿である。244は陶器碗である。全面に施釉され淡黄色を呈する。内底面・疊付にそれぞれ4箇所の白色粘土による目跡が残る。245は土師器の把手



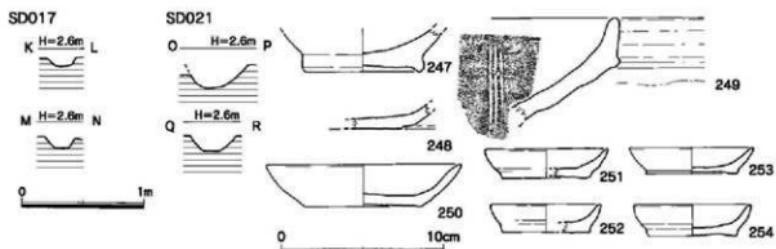
第21図 SD013及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

である。246は円筒形の土器である。内径2cmを測り、外面は中央にややふくらみを有する。ほぼ完形で重量は100gである。

S D017 (第22図)

調査区南東部で検出した東西溝で、本来的にはSD005・012を切って掘削されているものと考えられる。主軸方位はN-86°-Wで、溝幅20cm、検出面からの深さ10cmを測る。埋土は暗灰色砂質土である。溝底標高は東側で2.5m、西側で2.4mである。遺物は少量であるが、外底面糸切り土器器环・皿類、IV類白磁碗破片等が出土している。ほぼ直交する主軸方位から後述するSD021と一連のものと考えられ、矩形に巡る区画溝と考えられるが、これに伴う他の遺構は不明である。時期的にはSD021出土の小皿などから、中世後半代を考えておきたい。

出土遺物 (第22図 247・248) 247はIV類の白磁碗底部である。248は外底面糸切りを行う土器器皿である。



第22図 SD017・021及び出土遺物実測図（1/40、1/3）

S D021 (第22図)

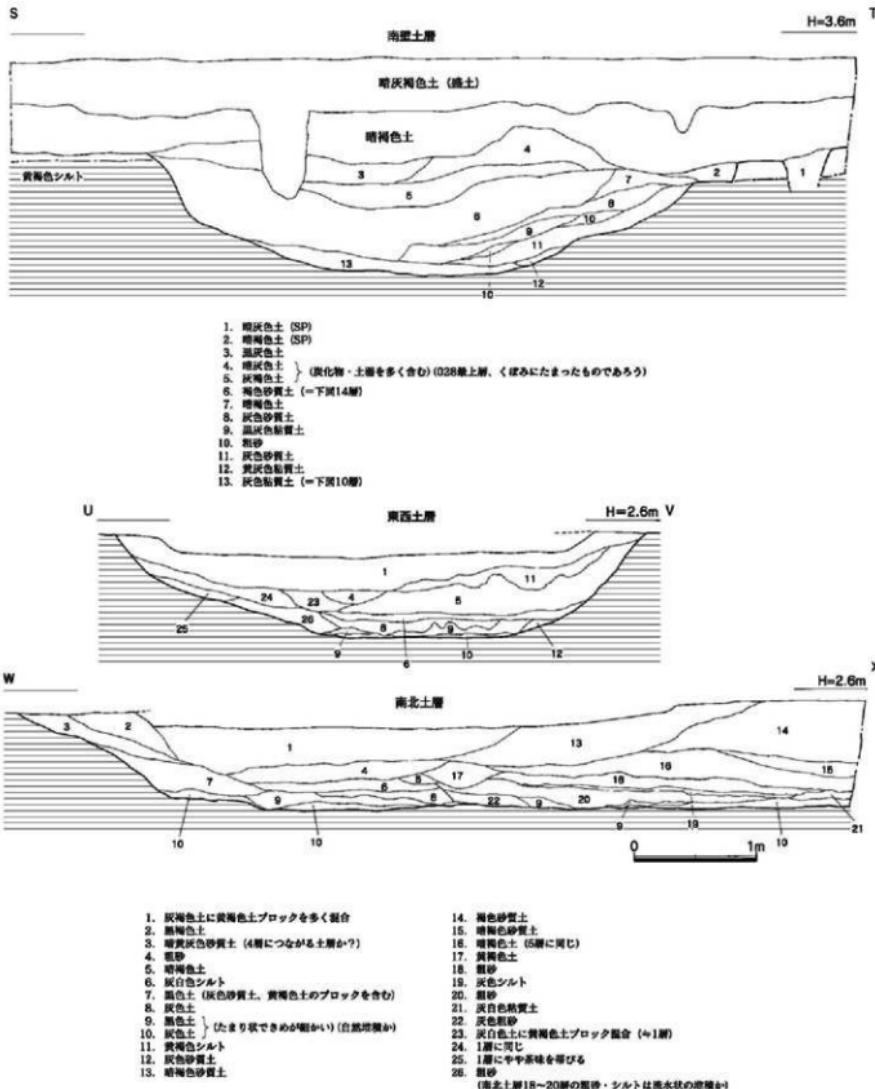
調査区南東部で検出した南北溝で、本来的にはSD012を切って掘削されているものと考えられるが、SK022との関係は明らかでない。主軸方位はN-8°-Eで、溝幅35cm、検出面からの深さ10~20cmを測る。埋土は暗灰色砂質土である。溝底標高は北側2.5m、南側2.4mである。遺物は少量であるが、外底面糸切り土師器环・皿類、陶磁器片等が出土している。前述のSD017と一緒に矩形に巡る中世後半代の区画溝と考えられる。

出土遺物 (第22図 249~254) 249は備前焼の擂鉢である。口縁部は直立気味で、下端部に張り出しを有する。250~254は外底面に糸切りを行う土師器である。250は环、251~254は小皿である。253には口縁部に煤が付着している。

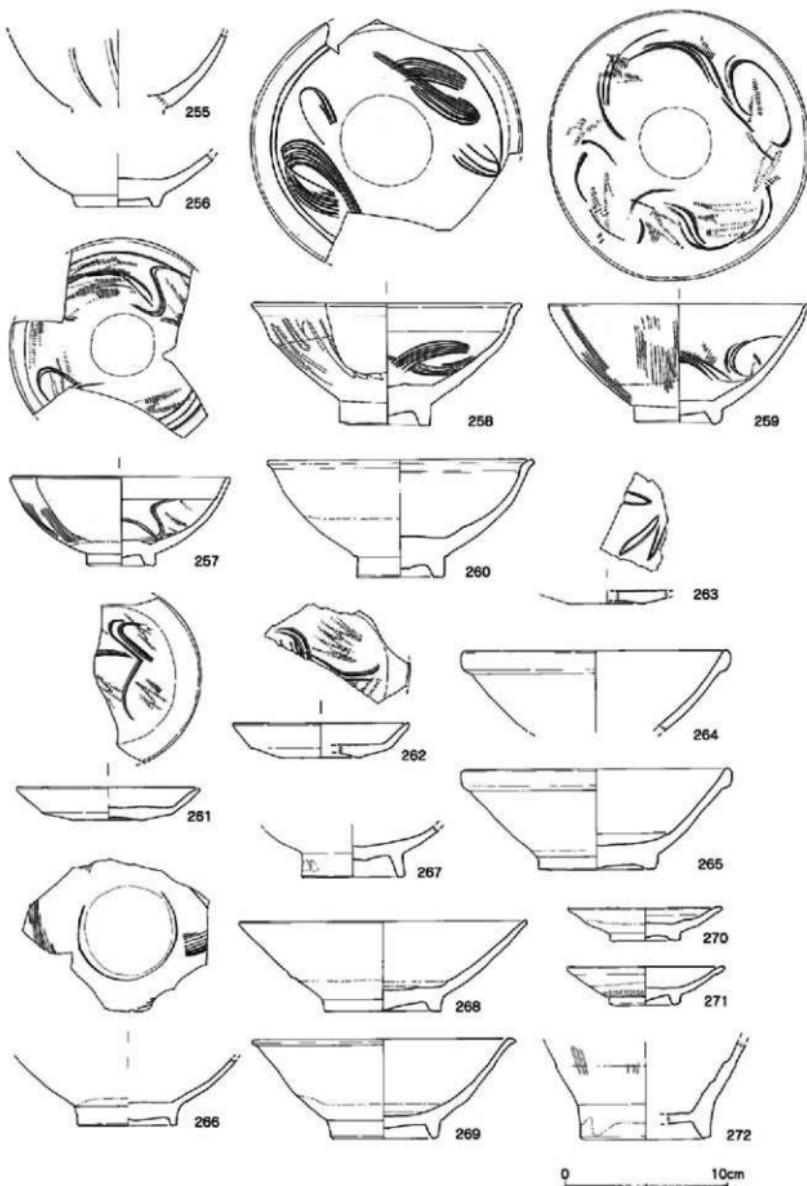
S D028 (第23図)

調査区西端で検出した南北溝である。調査時にはSD012が後出するものと考えたが、出土遺物の検討の結果SD028が後出するようである。主軸方位はN-2°-Eで、溝幅4.5m、検出面からの深さ90cmを測り、断面浅皿状を呈する。溝形状は均整が取れており、溝底もほとんど凹凸・傾斜は認められない。また平面上は直線的に延び、北側で明確に立ち上がりを有する。立ち上がりの北側は調査区外となり、陸橋を有して更に北側に延びるのか、この立ち上がりで溝が終わるのかは明らかでない。埋土は最下層にヘドロ状の粘質土が堆積し、その上層にはシルト・粘質土及び粗砂層が堆積している。遺物は埋土上半を中心コンテナ13箱出土している。土師器环・皿類は外底面糸切りが9割以上を占めるが、少量ヘラ切りのものも認められる。青磁類は同安窯系のものが多く、白磁はIV・V・皿類が大半を占める。また瓦は斜格子の叩き痕跡を有するものが多い。その他瓦器・滑石製石鍋・鍛冶津等が出土している。12世紀中頃と考えておきたい。

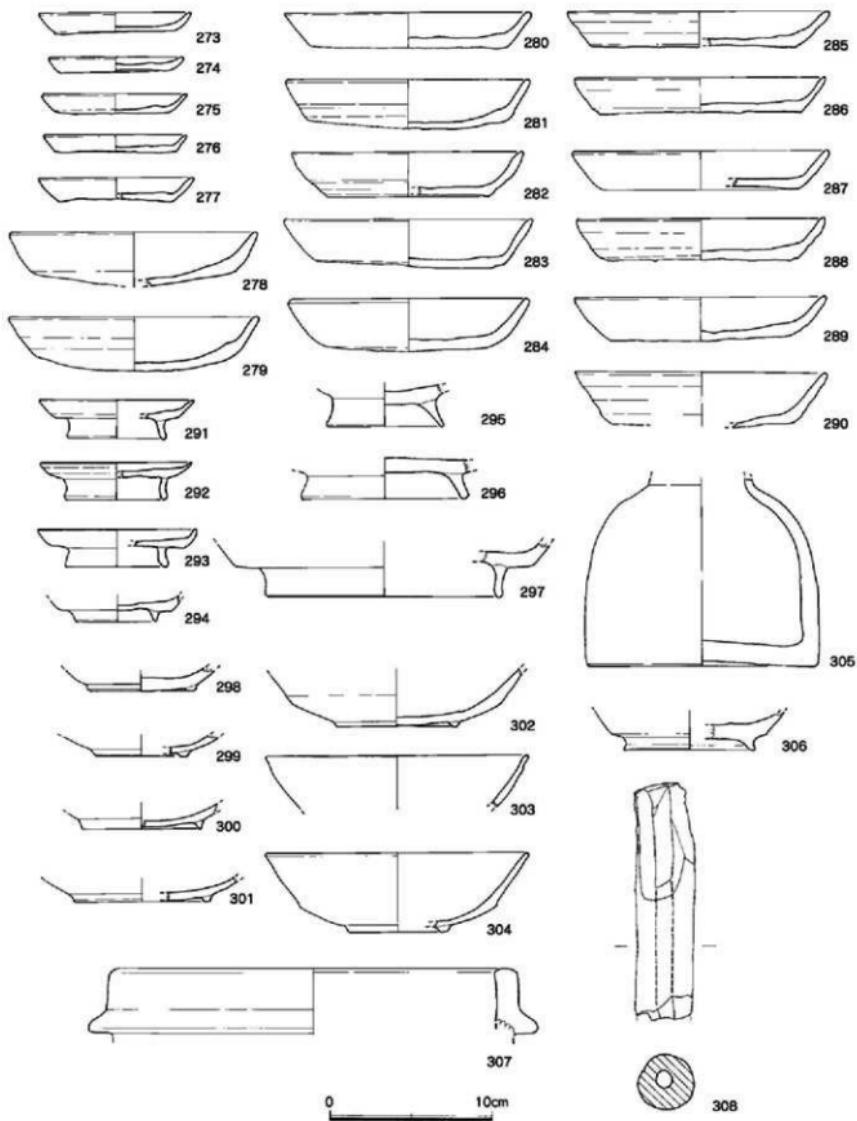
出土遺物 (第24・25・26図) 255・256は龍泉窯系青磁碗である。255は外面に片彫りによる文様を施す。256は外底面が露胎となり、高台疊付の一部の釉を剥ぎ取っている。257~262は同安窯系青磁で257~260は碗、261・262は皿である。260は無文で、その他は櫛及びヘラ状工具による施文を行う。263は青磁皿である。釉調は透明感のある淡緑色を呈し、外底のみが露胎となる。内底面には片彫りによる花文を施す。264~272は白磁である。264~269は碗、270・271は高台付き皿である。268~270は内底面の釉を輪状に掻きとっている。272は壺の底部である。高台下半より露胎となり、体外面には櫛状工具による施文を行う。273~297は土師器である。273~277は皿で、外底面は糸切りを行う。278~290は环である。278・279は外底面ヘラ切りを行い、280~290は糸切りである。环の口径は15cmを超える大型のものが多い。291~297は高台付き皿・环である。298~304は瓦器である。305は土師器の壺形土器である。底部はやや上げ底気味で、頸部はしまりが強い。306は古代に位置付けられる須恵器の高台付き环である。高台端部は外側に強く



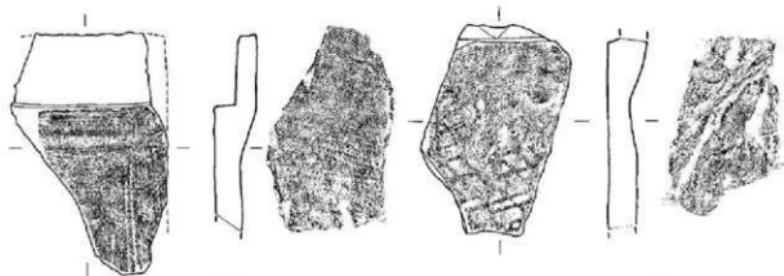
第23図 S D028実測図 (1/40)



第24図 SD028出土遺物実測図1 (1/3)

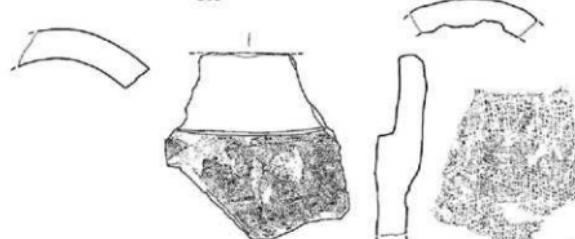


第25図 S D028出土遺物実測図2 (1/3)

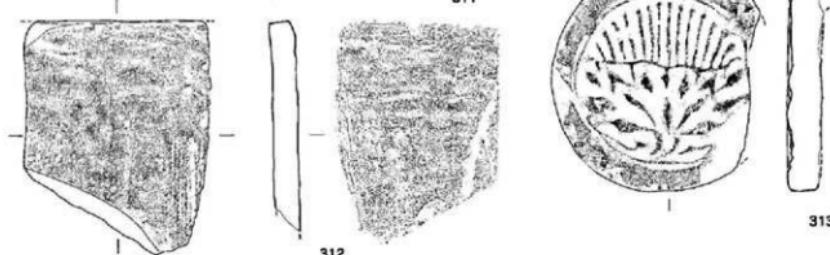


309

310

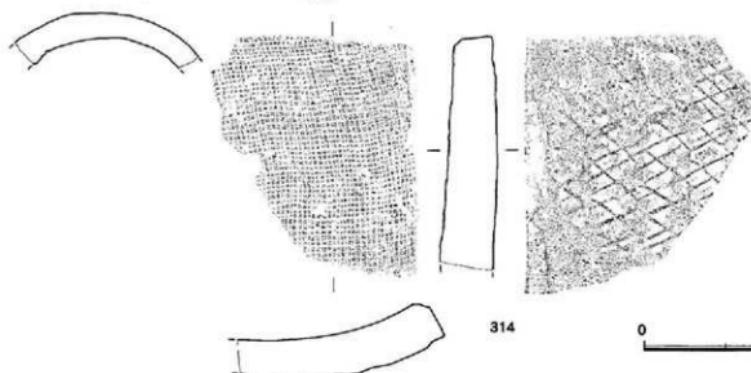


311



312

313

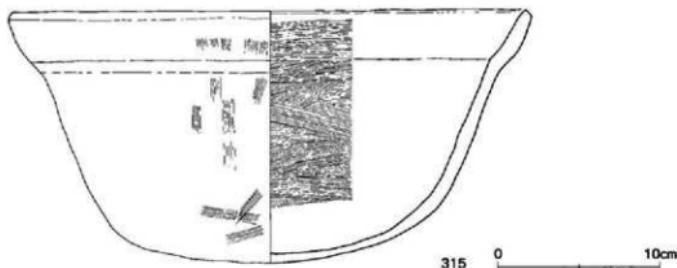


314

0

10cm

第26図 SD028出土遺物実測図3 (1/3)



第27図 その他の遺物実測図（1／3）

張り出している。307は鉤付きの滑石製石鍋口縁部破片である。308は土師質の中空棒状品である。上端部には接合面が残されており、脚部である可能性も考えられる。309～312は丸瓦である。凹面には布目及び紐状の痕跡が残る。凸面は綱目（309・312）か斜格子（310・311）の叩き痕跡が残る。313は花卉文の軒丸瓦瓦当である。314は須恵質の平瓦である。凹面には布目、凸面には斜格子の叩き痕が残る。

4) その他の遺物（第27図）

315は調査区東隅のS P110より出土した土師質の鍋である。ほぼ完形で内底面及び外面に煤が付着する。調整は外面が刷毛の後ナデ、内面は細かな横刷毛を行う。

5) 小結

今回の調査は住吉神社遺跡の第1次の調査であり、これまで詳細が不明瞭であった住吉神社周辺の遺構のあり方について重要な知見を得ることができたのでここで遺構の変遷をたどることによって簡単にまとめておきたい。本調査地点は現住吉神社の南西側で境内に隣接した沖積地上に立地している。現在住吉神社の本殿から参道は那珂川に向かって西面し、主軸方位をほぼ東西方向（N-88°-E）に取っている。また神社創建の時期については明らかではないが奈良時代には文献上登場しており、それを遡る創建と考えられる。また住吉神社北側50mほどの地点では西海道が推定されている。推定線は条理にはほぼ沿い、N-63°-Eにとっている。

今回の調査で確認した最古の遺物は弥生時代前期～中期前半に位置付けられる甕の口縁部（236・237）である。住吉神社には出土地点不明ながら埋納されていたと考えられる青銅器が所蔵されており、該期の遺構についても精査を行ったが、結果的には遺物が2点出土するのみである。また官道との関連から奈良時代～平安時代前期についても遺構を想定していたが、遺物が数点出土するのみである。最も古い遺構は11世紀代に位置付けられるSK029と12世紀前半代に位置付けられるSD012である。SD012は屋敷地等を囲む施設の一部と考えられるが、方位が他の遺構と異なり推定官道の方位に近いことは注目される。この後12世紀中頃のSD028では現状の主軸方位に沿う方位で掘削されていることから、この間に遺構のあり方に大きな変遷が認められる。なおこれ以降は大きく現状方位を外れる掘り方は存在しない。時期が明確で12世紀中頃以降の検出遺構としては、12世紀中頃～13世紀代のものは井戸4基、土坑7基、溝2条がある。また14世紀以降、中世後半代のものは、井戸1基、土坑8基、溝2条である。また注目される遺物としては高台付きの土師器皿・壺類をあげることができる。祭祀に関連する遺物と考えられ、神社との関連を強く想起させる遺物である。



写真1 調査区東半部全景（西から）



写真2 調査区南西部全景（北から）

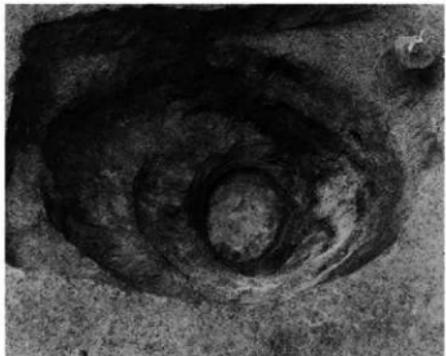


写真3 SE024 (北から)



写真4 SE030・031 (東から)



写真5 SE030 (東から)



写真6 SE031 (東から)

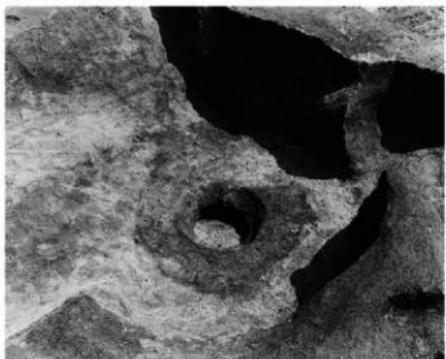


写真7 SE032 (西から)



写真8 SE035 土層

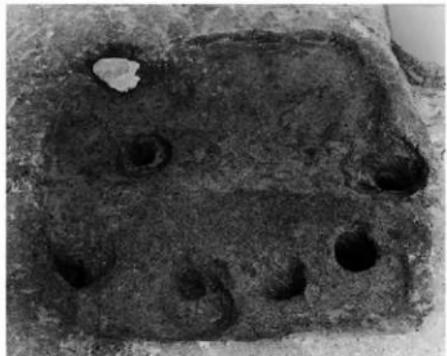


写真9 SK002 (南から)



写真10 SK004 (南から)

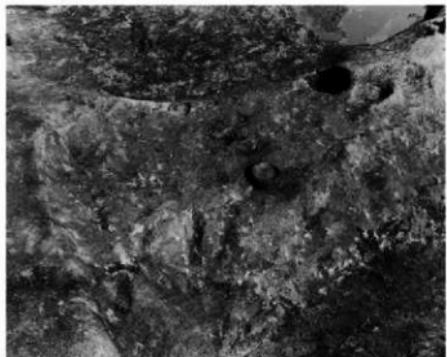


写真11 SK006 (西から)

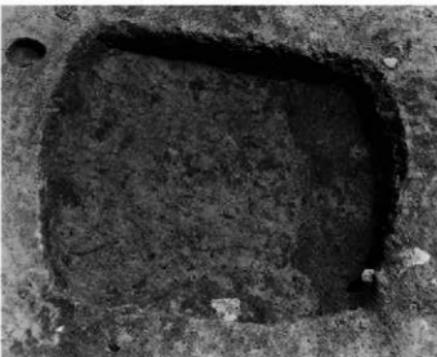


写真12 SK007 (北から)



写真13 SK019 (東から)



写真14 SK022 (北から)



写真15 SK026 (西から)



写真16 SK026 土層



写真17 SD005 (北から)



写真18 SD005 (南から)



写真19 SD005 土層



写真20 SD012 届曲部以東 (北西から)



写真21 SD012 届曲部（西から）



写真22 SD012 土層1



写真23 SD012 土層2



写真24 SD013（北西から）



写真25 SD013 土層1



写真26 SD013 土層2



写真27 SD012・028 (北から)



写真28 SD028 (北から)



写真29 SD028 東西土層1



写真30 SD028 東西土層2 (西半部)



写真31 SD028 東西土層2 (東半部)



写真32 SD028 南北土層

書名ふりがな すみよしじんじゅいせきいち
書名 住吉神社遺跡1
副書名 -住吉神社遺跡第1次調査報告書-
巻次
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号 884
編監者名 長家 伸
編集機関 福岡市教育委員会
発行機関 福岡市教育委員会
発行年月日 20060331
作成法人ID
郵便番号 810-8621
住所 福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名ふりがな すみよしじんじゅいせき
遺跡名 住吉神社遺跡
所在地ふりがな ふくおかはしかたくすみよし3ちょうめ44ばん1
遺跡所在地 福岡市博多区住吉3丁目44番1
市町村コード 40132
遺跡番号 49-2820
北緯 33° 35' 7"
東経 130° 24' 46"
調査期間 20040809~20040927
調査面積 381
調査原因 共同住宅建設
種別 集落
主な時代 古代 中世 近世
遺跡概要 集落 井戸9+土坑21+溝6+ピット

福岡市埋蔵文化財調査報告書第884集

住吉神社遺跡1

-住吉神社遺跡第1次調査報告書-

2006年(平成18年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
☎ 092(711)4667印刷 西福岡印刷所
福岡市西区姪浜6-9-27